

川柳塔

昭和四十一年一月九日第三種郵便物認可
昭和四十三年十二月二十五日印刷
昭和四十四年一月一日発行（毎月一日発行）
（第四十号）



No. 40

ゆーもあ特集

一月号



えらばれ

みがきぬかれた 灘の酒

超特撰 日本盛



超特撰 (化粧ケース入)
一、ハリットル詰・一、四一〇円

酒 清
日本盛

ニホンサカリ

灘 西宮酒造 釀

料理も電話も

551

ここがいちばん

TEL (641) 551-2

広東料理・焼餃子

豚饅 **蓬萊** 焼売

大阪 なんば

◆出張販売店◆

なんば高島屋／心齋橋そごう／梅田阪神／天満橋松坂屋
堂島地下センター・弁天阜頭支店／中之島サン・ストアー

今月のことば

新しい歳を迎えるという事はなんとしても
ひきしまる思いがする。ただ一年の計は元旦
にあり等力んでいる間に屠蘇の酔が花見酒に
続きそうになり、天神祭も終り冷房や扇風機
の仕末をしてると月見の薄が招く。訪れそう
な冷害予告をテレビが呼びかける頃大通りに
北風が吹きぬけて京では顔見世のまねきがあ
がる。ふぐ鍋の忘年会に追われていると今年
もこれでチョン。十年一日の如くである。
一年程前からハプニングという言葉をよく
耳にする。「創造することを生命とする作家

はたえず安易な常識や習慣を打破していかな
ければならぬ。自分の考えている問題を直接
自分の体で打出そうというのがハプニングで
ある。この精神は作家に限らず学者も政治家
も医者もだれにでも大切なものだ」ヨシダミ
ノル氏は言う。川柳作家にも当然そうした傾
向の考え方が起って来そうである。ただはき
違えた一人よがりが大阪駅のコンコースで踊
りまくったり、裸で心斎橋を歩くとかは頂け
ないのである。そんなの川柳家には出ないだ
ろう。

悲願尊く臼杵の里の秋に燃ゆ
千年の幽暗きびしく影を曳き
くずれ去る心石仏群に佇つ
衆生済度にみほとけ疲れたおん姿
石仏は口下手揃いにおわしまし

中島生々庵

川柳塔一月号

川柳塔一月号目次

題字・中島生々庵・表紙・直原玉青

今月のことばと句帖……………中島生々庵……………(1)

川柳塔……………(同人作品)……………中島生々庵選……………(4)

年末・年始……………若本多久志……………(2)

川傍柳初篇研究……………(六十七)……………(22)

前田喜代人・岡崎重義・清博美・藤井和雄
川端柳風・故高須亜三味・丸十府・岡田甫

秀句鑑賞……………後藤梅志……………(46)

近作柳樽……………西尾棗選……………(36)

初步教室……………菊沢小松園……………(50)

—— ゆーもあ特集 ——

川柳におけるユーモアの要素……………北川春巢……………(26)

私論・柳論

年末・年始

いつもこの頃になると思い出す句が三つ、四つある。

十二月うれしい風も少し吹け

これは路郎先生が、苦しい生活の中に歯を食いしばって川柳雑誌の刊行を続けておられた頃の作と聞くが、先生亡き今にして一入、当時のご心境を追憶して尊くも感じさせる。

除夜の鐘借金とりも寝たかしらこれも今は亡き先輩、香林氏の句である。当今の若い人に歳末の借金とりや、掛取りといった言葉のニュアンスは解って貰えないが、明治・大正の人間には所謂「金に恨みは数かずござる」でこんな切ない思いで、正月を迎えたことも再々あった訳である。

それにつけても有名な古川柳に元旦にいけしやあしやあと甦りというのがあるが、これは大晦日に借金とりを撃退する方法として「実は、大事な主人が今朝、頓死

梅志・紅雨・章雅・徹也・無聖・靈眼子・鉄舟・智水庵・潮花・独仙・旅風・静歩・素身郎・滋雀・幽谷・一保・没食子・恵二朗・静馬・旭峰・不水・柳志・葵水・みのる・十九平・一水・杜的・春巳・代仕男・布堂・魚山・飄太・緑之助・柳慶・弘生・笛生・喜由・千梢・丁路・大江秋月・水客・千翁・好祐・一声・水車・不酔・洛酔・美代・白柳・礎山・初市・トメ子・求女・柳子・秋月・珠笑・阿茶・東雲楼・蘭幸・弘朗・美房・三幸・貞山・形水・竹荘・一舟・晃男・いわを・静水・甍光・どんたく・文秋・あいき・甲吉・奈良子・野迷路・庸佑・酔夢・一三夫（到着順）

川柳塔社同人名簿……………(54)

雅号ぶつちゃけばなし……………久米奈良子…(51)

大萬川柳「塩」……………清水白柳選…(52)

★柳界展望……………(薫風)…(56)

★本社十二月句会……………(庸佑)…(58)

★各地柳壇……………(文秋)…(61)

「鳥」……………川端東雲楼選…(48)

一路集「テール」……………小林孝正選…(48)

「柏手」……………服部十九平選…(49)

★編集後記……………(一三夫)…(77)

致しまして……」と逆屏風の内に主人を寝かせて、死人の真似をさせ、女房は空涙を流しながら、お払いの延期を乞えば、鬼のような借金とりもその光景に同情して、払いを待ってくれるばかりか、香典まで置いて帰る者さえあったそうである。

明くれば元旦、死んだ筈の主人は目出度く蘇生して、シャア、シャアとお屠蘇を祝っていたという昔の浮世話は、ユーモラスで面白い。

謹賀新年金は返すと書いてなしこれは柳友川村好郎氏の句。事業に失敗して夜逃げ同様に、北海道へでも行ってしまった友人が、毎年正月になると筆跡も見事な年賀状を欠かさずにくれるのだが、貸してやった金のことは忘れた訳でもあるまいに、何とも言ってくれないもどかしさ。どうせもう、歸らめてはいるものの、遠い空の下でどんな生活をしているやらと、ほのかな友情さえ感じるといふ、心暖たまる句である。(若本多久志)



中島生々庵選

青森市 工藤甲吉

デモ・ストを曲学呵世もて余し
銀行の隣にいても倒産し

鹿兒島と青森二人ウマが合い

ツルハシをふる母がいる裏して

ハンドバッグいのちと共にある如く

倉敷市 水粉千翁

ごもっともさまで他人の顔が出来

睨まれる覚悟が光る正義感

コンクリートの不覚亀裂に花が咲き

看板へ見向きもさせぬほど流行り

霜を着て雀と対話する案山子

京都市 都倉求女

大銀杏風も知らない葉を降らし

焼かれるか押し葉か落ち葉の運不運

しつとりと時雨れて京の屋根の艶

のぞいてた愚痴のみこんだ蒸したオル

爪切りの音も鋭く秋の冷え

岡山県 浜田久米雄

気に食わぬことありひとりつけて飲み

年寄りのひがみが朝をまだ起きず

血圧を気にすることもなく気にし

人生に執着があり酒をのみ

日本に酒あり初春の陽がたのし

岡山市 服部十九平

七十五日たてば消えると度胸決め

満ち足りたくらしへスリル欲しくなり

守銭奴の笑顔一円貨を拾い

ぶらんこが揺れ童心にかえらせる
非常線私服も混る焚火の輪

鳥取市 河村 日満

甲府方面旅行 (二句)

窓あけて浅間の空気汽車に入れ
晩秋の小諸に泊り想うこと
明治百年恩赦が済めば用もなし
まっくろな名月だから妻も見る

特急白鳥にて

八時間を喋り続けて女降り

名古屋市 吉田 水車

そのけそのけ編み棒がおどる
人間が月へ行くげななあちろり
着こなしも板につく頃退社して
もみじ葉にすれば尽きんとする命

新年

初詣で六十六と申し上げ

大阪市 正本 水客

柳生の里

くろぐろと無人の森は社抱く
六地藏 街道を昔の色にして
十兵衛杉 梢から歴史降りかかる

かくれ里として清冽な水に耐え
弁当の木陰は家鴨がき小蛇が来

高槻市 傍島 静馬

十二月別居が実家へ泣きに来る
世話好きが家ではアゴでこき使い
慎重でよろしをのろま真に受ける
庖丁の腕がへんくつかパーする
年寄に広告マツチすら呉れず

岸和田市 内藤 きさ子

能登路

流された歴史ばかりをきく能登路
京を恋う平家に能登の月わびし
日本海は怒り秋雨はすすり泣く
ほの暗き部屋に育った輪島塗
文化まだ届かぬ果てにある誇り

岡山県 藤原 秋月

年あらた今年もあかへんかも知れず
清貧を楽しんでるとは負け惜しみ
ここらから斜陽系図をじっと見る
小包みへ切手がぎょうさん母の愛
寒風に家出の決意ちよつと揺れ

豊中市 戸田古方

あたり前のことというていてあたり前
いい負けそうになって老子をよんでくる
控え目に塗れば唇マゾめいて

フロイトがさわぐおかしな夢ばかり
般若の面とことんきわどい顔にみえ

奈良県 草深醉升

オッチャンと呼ばれ定年後のつとめ

さりげなく聞いててすごい地獄耳
ほろ酔へ妓すかさず煽てに米

これと言う策も無いまま十二月
陸橋で別ればなしがまだつつき

大阪市 大坂形水

十二月相手の悪い事故起し

大晦日おとこ螢光灯の傘を拭く
相続の税金耳にするも齡

一キロも車が続く神詣り

三人が亜鈍一人の酒に負け

大阪市 橘高薫風

嗚呼清原祐志君

棺出た跡形もなき療養所

耳濡らす涙 生涯仰臥の身

菊の精を見き 童貞を見き 君なり

君の骨 栗拾うごと拾われよ
骸と同じ形でこの夜寝る

大阪市 不二田一三夫

親も子もないのか眼ばかりの男
売れぬ詩の大言壮語聞いてやり
よく笑う男 よっぽどさびしそう

孫抱けば孫のことばと顔になり

寄席

あんパンを囓ぶったままで笑いかけ

香川県 岡田拳法

貧乏くじ引いてなるかと身構える

父として不運で済まぬ子の育ち
心から笑えば空の浩いこと

自動車学校

コーチには素直に動く車なり

今治市 越智一水

内職の妻一円のことをいう

秋廻路笠で落葉をうけとめる
ひと休みせよと峠の石仏

貧乏に負けてウソつくことおぼえ

大阪市 市場没食子

老人がうようよ希少価値すたれ
如才なしダウの高値で利喰もし
水虫とストレスのまま退官し
人生に狸寝もあり面白し

倉敷市 本田 恵二朗

明治百年フーテンという虫がわき
地図に無い道を知ってる儲けてる
泥んこの過去があるから今日がある
僕に賜る拍手補聴器こわれそう

大阪市 児島 与呂志

君の嘘僕が知ってるそれでいい
青空に人生何を思うべし
紅葉の中のみどりの美は強し
公園の静けさバトカーつつ走り

大阪市 山川 阿茶

祖母育ちきめのこまかい味を恋い
ふだん着でゆく戎橋気もひけず
高い化粧品のかぶれ健保でなおし
体温がまだ残ってる借衣裳

高槻市 若柳 潮花

取り巻きのひとりひとりに立つ噂
消えかけた恋さえ時々もゆるもの

秋の舞台より
花笠の酔いへ祭りのきやり節
振袖の恋へつれない日高川

岡山県 直原 七面山

唇の色はデイトという赤さ
妬きすぎる程の女房で夫無事
だんだんに夢がしぼんでゆく師走
自分から解めぐらせている孤独

岡山市 江国 幽谷

秋の風蛙の肌に冷たすぎ
息子らにかくれて俵さげて見る
失業をさせたブルドーザーの力
表彰をされて再婚ともいえず

宇部市 平田 実男

ハンデイは三十こうもり傘を振り
カロリーで食わす食事ものがもの足らず
借りていた金は返して借りで飲み
書き初めの禁酒を妻の目が笑い

倉敷市 野田 素身郎

まだ奥に住むのか山の駅にバス
野心などなしホステスと痔の話し
ぼろ家を直すに檜の櫓のと

二木松峰の牧水碑を訪ねて
牧水の歩いた道を引き返し

大阪市 中川 滋 雀

どこまでの仲か寄り添うシルエット
不感性にさせる値上げに逆えず
熟れてなお柿は孤高を枝に耐え
都会も秋せめて落葉の道を選び

新居浜市 安藤 桂 仙

因果にも亀は甲羅を着て生まれ
豊年へ去年の米があわてだし
巻寿司へ穴あけて食う孫もおり
ふんまんのやる方もなく月がさえ

桜井市 岩本 雀 踊 子

青春のはけ口角棒だけの知恵
寒い夜妻にも少しついでやり
生きて行く知恵背信を笑うまい
うまれつきと云う大声をたしなまれ

倉敷市 木村 千 容

明治百一年頌春

百一年声を合わせて唄おうよ

百力日忌

百力日忌安座遊ばせ大居士位

混迷の世相へ老眼閉すのみ
目の上の瘤こぶなりの役があり

室戸市 奴田 原 紅 雨

一人もう酒屋へ走る行動派
緋牡丹の崩れるを見た月見草
水溜り跳ばずに廻る齢となり
女房がなんだと余程恐いらし

大阪市 木村 水 洞

沖繩を心配するほど余裕出来
将来の婿とも知らず犬が吠え
四捨五入生涯四捨の部に這入り
湯の山温泉

生きているしあわせ屋の湯に没り

笠岡市 木山 遠 二

歯が抜けて気のよさそうな顔となり
朝寝して年賀はがきを買ひそこね
賀状書く去年とおなじことを書く
田も畑も荒れるに任せ土地ブーム

熊本県 有働 芳 仙

泣きながら石を握ったまま帰り
満願の日の石段を恐く踏み
指切りを忘れる人で憎めない

熟れ過ぎた一山庶民の味で売れ

ハワイ 築山快夢起

選良と云う名が祟り笑われる

株値上げ古疵なめて口惜しがり

わだかまり解けぬ心の猪口を伏せ

何事も日米親善眼をつむり

東大阪市 久米奈良子

父眠る墓地本籍は移すまじ

気まぐれの蝶ともしらず返り花

愛の証しさぐれば揺らぐばかりなり

会者定離車はすでに動き出し

大阪市 本多柳志

藤村を読んで木曾路へ足が向き

大阪の義理を立てとく粟おこし

日の丸が静かに立っている平和

川端文学受賞

訳されてから原作の美しさ

下関市 桜川不水

みの虫の秋を覗いてまぶしがり

秋深し針目をすかすおくれ髪

掃くほどに落葉が頸にたわむれる

盃を上限で受ける白い指

大阪市 西出一栄

霜月の雨はもみじの紅に染み

癒えやらぬ足の痛みは今朝の冷え

噂など馬耳東風にマイペース

おついしょへそこらに穴がおまへんか

下関市 国弘半休

鍵をする障子をあけてみて閉める

昂奮を静める紫煙丸く吐き

紫を着て仲居さん歳がより

新聞を今日も丸めて時差出勤

神戸市 仲どんたく

縄のれん全学連をさかなとし

母子寮を出て口紅をひく暮し

鯉はねてあとに音無し月の庭

年末にそなえて風邪も済ましとき

大阪市 金井文秋

人間のエゴが野犬にしていまい

スーパーで安くないのも交せて売り

古本屋愛想がよくて面喰い

湯のぬくみ抱いて早寝をする寒さ

鳥取市 森本法泉水

明治百年祝う人騒ぐ人知らぬ人

干拓をしてまで米を剩らせる

過密過疎日本はひずむばかりなり

日本ラインここにも嗅い水が湧き

大阪市 石倉旅風

寂しけりや迎えに来いよと鉦叩く

わしが鉦たたく姿を可笑しがり

鉦たたけや返辞代りのけむりるる

人ひとり死ぬ不思議さを見てきた眼

高槻市 福田路

泣き喚き悶え地獄へ落ちた夢

押しつけの肩書がふえ皺がふえ

東北地方秋の旅

みちのくの錦の山にかかる虹

中尊寺霧が流れて鐘が鳴り

愛媛県 渡辺曉童

名古屋、岐阜方面旅行

雨をもつ伊吹を背に駿河晴れ

悲史哀史ガイドに休むひまがなし

義仲寺の哀話も耳にない車中

まっぴるまの貨物列車はいとわびし

出雲市 弘津柳慶

ジーンと手を握れば病床の涙ぐみ

汽車の旅他人の笑につりこまれ

ヤレヤレと私服を脱ぎお茶にする

明治百年幹部は大正の代となり

京都市 松川杜的

西国三十三所順拝（花山院）

御詠歌の声に本堂の近さ知る

西国三十三所順拝（上醍醐、岩間寺）

詮索は止そう有髪尼との対話

蕉翁の蛙の池と後で知り

西国三十三所順拝（槇尾寺、播州清水寺）

蓮池の広さへポツンと弁天社

青森県 木村涼人

商魂は変な祭をデッチあげ

駅伝が東京へ発つ菊日和

御破算で願いましては初日の出

無いようで有る靴下の右左

奈良市 宮口笛生

男とも女ともつかぬのがはやり

雪の降る深夜通過駅定時

まる徹夜無事故で終る朝の風呂

物価上がっただけで一年たたとす

守口市 羽原静歩

幼稚園あれこれ（二句）

クレパスの折れた瞳に母がいる

泣いた子のピカソするする出来上がり

伸びきった蔓がやっぱり天を指し

小豆ほろほろ炭火の音がはぜ

芦屋市 丸川初甫

自己紹介独身ですとつけ加え

指出しただけで追加の酒が来る

多忙とは別パーマに三時間

人間の迷いへはほ笑む観世音

平田市 久家代仕男

芒の穂分けて釣場へ降りる竿

仕合わせに馴れては困る子を叱る

柿色づいて亡き妻のこと憶う

冬仕度せよと銀杏が散って見せ

富田林市 川端東雲楼

小春日和蠅椽側で日なたぼこ

家計簿を亭主のぞいて叱られる

着るよりも見せるふとんの団地族

神さまを拍手ぜめの初詣で

倉吉市 奥谷弘朗

問題のもめた団地は草のまま

親の目に不良に見える赤いシャツ

欠点が好きになるのも親心

どの品も思い出があり手ばなせず

岡山県 木山要次

あと継の芽をたしかめて紅葉散る

老化現象すぐに涙を落す妻

満足な日々が善意に受取られ

しみじみと金にならない日が暮れる

香川県 三井酔夢

満月に身のおきどころなき流人なる

去るものは去れでは企業成りたたず

故郷のよさなど若さ目もくれず

山を見よ何をあくせく海を見よ

豊中市 寺田花宵

人生を急かせるものにハイウエイ

蔭口の好きな女が上り込み

威張る時男哀れみ乞うごとし

言い訳を言葉に出して墓参り

諫早市 川岡靈眼子

嫁ぐ娘に詩を拾う

子の欲と親の欲とで品を定め

年寄があるので喪服まで持たし

ライバルを招待するので派手になり
若かった母に似た娘を送り出し

大阪市 福井野迷路

秋深かし落穂の幸のない雀
天高し頼りなく飛ぶ蚊一匹
振り向いて後姿も鑑賞す

道頓堀

どぶ水へグリーンベルトの濃化粧

松江市 小林孤呂二

すてきれぬ良さを生かせぬまま過疎地
さむさを労る湯豆腐の湯がたぎり
死んだのか今日はこうろぎ鳴かぬ庭
絵はがきと違う名所の良さに触れ

大阪市 河井庸佑

激戦のゆかりの山をハイキング
これしきの事ができぬをはがゆがり
丹精の割に小さな菊が咲き
きたんなく言えと言わせてマークする

大阪市 天正千梢

貫禄は変える話題へたじろがず
自動車を買いつ時点を農を捨て
やどかりに似し宿命の殺背おい

決裂へ歩みださぬゆとりもち

兵庫県 遠山可住

べんちゃら言うて孫を抱かしてもらうなり

天高し喜怒哀楽を呑み込んで

養鯉場視察

十円の鯉は夜店の子に追われ

俺の月給がうようよ泳いでる錦鯉

大阪市 川口弘生

用二つ重ねて出不精腰をあげ

死ぬまでは俺が死ぬとは思ってず

当らずにホッとするよなくじもあり

全盛の時は二号の墓も建て

奈良市 村上春巳

北陸の旅

肉付の面より尼僧の顔厳し

むしゃむしゃと鹿センベいの値を知らず

ボスと言う鹿貪欲な鼻を出し

箒目の波を落葉の着くところ

善通寺市 岩田ひさお

干し柿よ都会のたより絶えたり
硬貨ころがってわたしをあざ笑ひ
被爆手帳申し訳なく異常なし

中学バレーボール大会

敗けて泣く娘でよし父の血が通い

岸和田市 葛城伊三郎

口明けて竿のとどかぬ柿を見る

もずの声遠くに聞いて落葉たく

髪染めて釣合い取れぬ顔になり

大虎に化けて日頃の憂さ晴らし

大阪市 吉岡美房

凱旋のように迷い子届けられ

アベックに腹をたてつつ追い抜けず

ターミナル悲喜交々の十二月

子なき身をいつから余生なりとする

美禰市 安平次弘道

持ち前の強気が当てた大相場

無神論でよし観光地の祭

同郷とわかり面接くだけで来

腹芸で話が進む舞台裏

出雲市 原 独仙

六歩利のある争いを負けて勝ち

肩の凝る話炬燵の猫も出る

クリームも老化の肌で落着けず

十二月男飲む日の多かりき

ハワイ 羽佐間柳葉

嘔吐いて居るなと思う瞳の動き

己が恥聞かせて勉強子に勧め

人生も黄昏と云う歩きぶり

酒癖が祟り宴会忌避される

出雲市 尼 緑之助

柿うれて最後を飾る葉が飛んだ

みの虫の落葉と共に焼かれたり

本番も地で行くほかはない齡

藤井寺市 西 いわを

我が影を写して水は流れない

鏡にも戯れがある立姿

急がない頃は景色も見た電車

大阪市 早川清生

用のない表札を読む遠い道

旅の汽車同じ顔した町を縫う

革命の闘士始めは父と不和

門真市 福島鉄児

とほけてる顔へむかつてみたもの

提灯に釣鐘あつまりやめなはれ

ほろくそに叱った悔がほろ苦く

京都府 大鶴喜由

雪に思う新潟の夜置炬燵

年賀状活字の外に筆を入れ

子に気兼ね三度の菜二度にする

兵庫県 大江秋月

良縁が二つどちらも捨てられず

三十割乗せて駅員尻を押し

義理がたい母おかえしへ気を使い

岡山県 田村藤波

城下町古い看板にある誇り

倒産をして看板がよく目立ち

その決意其の決意とて励まされ

島根県 藤井明朗

逃げるお金追うて忙しい十二月

顔役もあっさりゆずる世相知る

訪う人もなく晩秋の滝枯れる

竹原市 山内静水

通訳が要る迷い子になつかれて

若い気の僕にめっきり老けた友

妻時に母の匂いもして厳し

伊丹市 小川静観堂

四五十そんな若さがあったのか

捨てねばならぬ恋すてて五十年

ひよんなことから首の破目袈裟御前

和泉市 西岡洛醉

物思う僕に雀がしゃべりかけ

再婚でもする気か妻の隆鼻術

強悪と云うに柔和なモンタージュ

松江市 岡崎祥月

老らくのでも色ごとは別なもの

意地悪をする眼の奥にある秘策

愛妻家などとくすぐる友にくし

大阪府 酒田清子

クイッククイックスローがスローだけつづき

食べられる頃には見舞途絶えがち

さりげない所作に教養にじみ出る

松江市 中川晃男

働いている顔どれも美男美女

面白いほど儲かって浮気せず

空青く雲白く山陰も秋半ば

鳥取県 清水一保

紅葉二三枚土産に紅葉狩り帰り
愛情にうたと云わず菊しおれ
好きな酒医者が許して又不安

松江市 舟木与根一

百姓が農業となった知恵がいり
ぼつぼつ大器晩成角がとれ
恥ずかしいところを看護婦無表情

大阪市 今西章雅

善人と云われてこそばそうな顔
演者のない漫才台本書いて見る
御理解願いたいと陳情下から出

岡山县 大森娛句楽

負けぬ気の文化の日にも稲を刈り
寄せ植えの紅葉机上で秋の色
饗さん落葉踏分け来た雅兄

兵庫県 河原みのる

メキシコオリンピック

チャスラフスカゼッケン四十九気にならず
アルミの戸腹立てた音してくれず
うずもれて死にたきものよ秋の菊

和歌山市 垂井葵水

菊百花叙動にそえる薫満つ
三千院カラーフィルム入れかえる
踏切りの旗がよごれている夕陽

和歌山市 野村太茂津

御本家に負けるな祖母の心意気
膝小僧ばかりが目立ちお茶の席
胃病なら医者より詳しと自惚れる

堺市 新谷笑痴

請求へ息子の借金差し引かれ
埴輪から日本の器用見つけられ
言分があるから足音高くする

高槻市 山田季賛

土壇場を上手にのがれほつとする
吸ガラも湯のみに入れる妻の留居
横車押せる身分をうらやまれ

宝塚市 小島無聖

ひとなみになりたい努力の勇み足
六十をあざけるように丸い膝
黙ってさえおれば美人と思つたに

鳥取市 藤本礎山

いい話先だつものがないつらさ

貫禄が胸で条件享けとめる

生き甲斐は慕って呉れる人がある

岡山県 池田古心

反収がどうのと話題秋深み

農繁期寝不足の足けつまずき

寝て居れと医者言うけれど農繁期

高石市 谷沢好祐

就職が決りバイトに精を出し

竹槍は戦時 角材振る平和

合掌の形で女思案する

倉敷市 小幡里風

交通禍案山子何かを云いたそう

偽れる盛装ばったりすれ違い

明日の詩うたい少年米を研ぐ

倉敷市 井上旭峯

興信所先祖の墓も見て戻り

耳がまだ聞えて姑の不倖わせ

離別せぬ程度の喧嘩で子が育ち

堺市 高橋千万里

好奇心嚙さの女の裏をきく

素人と見てか餌だけ又取られ

美容食すすめた方が姑なり

大阪市 福井多蘭子

日本は広い秋の野を走り

金取りに来る人もあろう休んどく

喰うて酔うて念仏唱えて寝て終い

岡山県 横山一声

十二月最後の鉢巻しめ直し

親友も賀状だけの友となり

忘年会にいとむ体調ととのえる

大阪市 宮尾あいき

ママみたいなりたくないとな娘が戻り

人間の真似して桜狂い咲き

越冬のきびしさ知らず草萌える

竹原市 小島蘭幸

仕事する靴とデートをする靴と

小企業すぐやめそうなのも雇い

憎めない男にまたもとばけられ

枚方市 宮川珠笑

酔うた目に活字細かく並びすぎ

白書では年収ばくより下がいる

指一本出せば一級酌ぐ屋台

鹿児島市 土岐トク子

こんな日もあろうかと全快泣き笑い

身構える老女の肩のうすきこと

ヒットする二短調日本の心知る

泉大津市 高津徹也

町会で一番うしろにすわるくせ

とそ気分さてこれからの行き所

お正月湯気の向こうの妻の顔

笠岡市 松本忠三

二次会の領収証をどうする気

なす術も無くアンケートだけをとり

丹前に小銭ねじ込み旅の夜

愛媛県 村上旭童

満潮へ廃船は又沈むのみ

年金があつて見事に菊の花

取りいれが済んでそれからいい日和

富田林市 岩田美代

空しさと希望振子のようにゆれ

心うきうき新春の神楽へ口太鼓

よろよろと歩くかまきり冬の色

青森県 工藤安亭

屋台酒酔えばたちまち王者の気

婆ア付き夫唱婦随という家庭

パンのため今日も舗道をチビた靴

大阪府 浅川八郎

医師榮転いのち預かったこと忘れ

婆付きをニンマリ受ける惚れっぶり

才女だがそれでもやっぱり女です

広島県 高橋鬼焼

行く雲にことづけもなく背を丸め

全快を花は待たずに散りいそぐ

全快の歩巾を風が押してくれ

松江市 柳楽鶴丸

安サラーリ戸主を女房にゆずりたい

秋日和読書の時間うばわれる

明治百年と流行歌

ザンギリ頭が唄う書生節官員節

堺市 青野遊仙

御用聞き遠去かりゆく酒の量

黒い毛がはえてきそうな風呂あがり

何もなければ笑顔で人を喜ばさん

笠岡市 出原真奇

療友で別れて句友で再会す

台風がそれたで雨もりそのまんま

本心を申せば貴方は嫌いです

久留米市 永松道雄

兄弟皆役付となり墓前祭

神妙に連れ戻される夜の道

つつめける井戸端会がよくしゃべり

大阪市 室谷鉄舟

ひねくれた盃が居て座がしらけ

遠慮なくこたつへミニの脚延びる

古新聞馴染の屑屋待っている

倉敷市 松下梁水

失恋をミニより親の方が病み

誠実が売りもの掛値してまへん

冷戦が兄の無邪気さに溶けはじめ

松原市 谷垣史好

ラッシュアワー日本に生まれたのを呪い

肌寄せ合うて生き甲斐たしかめる

書店煌々と立ち読み繁昌し

八尾市 高杉鬼遊

えび天の尻尾に誇りらしきもの

階段へ母の歩巾の手をつなぎ

男一匹パチンコ玉に愚弄され

大阪市 西川誓二

おののいて話す言葉に暇が入り

頬ペツたに弁当付けて手を焼かせ

旅先の浮気が匂う肌着替え

姫路市 隠岐不醉

七転び転んだままで芽がふかず

呼ぶ人があればとお医者注射うち

陳情団ウンヨシだけで満足し

ハワイ 上田紅溪

噴煙で布畦をつつむペレの神

今日の雨花も芝生も生きかえり

アポロ七号今日もテレビの前に待ち

大阪市 宮地双楽

長命に恥じず希望の炎もえ

女秘書話題の中にすましてい

冬眠の穴もダンブは遠慮なし

和歌山市 西尾公作

かくすのに困った米が売れ残り

新宅がやり手で本家つむじ曲げ
眼鏡越しぐっと見据える貸付課

大阪市 本庄金三

苦勞する覚悟で娘惚れて居り

石切でおでき癒った人と会い

ネオンの灯へ十時はとうに過ぎて居た

鳥取県 森田布堂

雑巾のついで掃除器拭いてやり

疑わぬ童心の目をふと怖れ

日の丸が軒に淋しい町となり

東京都 石居高志

名月へ「そうか」とテレビ向いたまま

信じない筈の暦で日が決まり

自宅 棟

一生に一度だ飲めと妻にさし

大阪市 加藤貞山

文化財を尋ねて四国路へ

二毛作南国土佐は天高し

桂浜何を夢みる竜馬の目

闘犬の横綱するどい顔に疵

西宮市 若林草右

肩書きが告別式に人を寄せ

デイトらし暗号めいた電話口

呉市 林野甍光

松の青いよいよ冴えた門構え

遅々として妥協の線へ遠ざかり

大阪市 水谷竹莊

定年へ妻新築の夢を持ち

酔ったふりするのもうまい遊び好き

和歌山市 土谷城石

足らぬ米下手なやりくりして余し

ボンと寄付さすが本家の旦那はん

西宮市 島居百酒

盃を遺影に供えて年忌更け

民謡に呼び寄せられて佐渡の旅

京都府 清水谷 句楽坊

頭そる風呂でのんびり除夜の鐘

ねて起きていつしか八十路こえて春

加賀市 細呂木魯木

信仰へ老と若さのずれを見る

おくすりとかけっこ今日も夜が明ける

小松市 馬場魚山

嫁ぐ日が近い朝から何かぬい

食欲の秋へ古米がもち込まれ

岡山市 川端柳子

平和とは言え独り居の物足りず
運のよい風は美人の頬を撫で

★

菊沢小松園

生活に戻る虚しき恋なりし

貰い手の無い猫日増しに太り

事故多しもうい路角で虫が鳴く

花鋏秋には秋の花を剪り

横断歩道無視して犬の無事渡り

清水白柳

故里はありけり切符買い急ぐ

世紀の雑音だ大衆団交のマイク

見つめられるのはホクロのせいじゃない

あいさつはおおむに似たり新春の街 (新年吟)

川村好郎

みにくさを写す心の鏡拭く

蓮の冬沈黙の奥に期するもの

奥さんに聞けばそんなに儲けてず

なお歩く何かに押されみちびかれ

花と対話女ひとりの城もよし

北川春果

物云えばすぐにも評論家にされる

本年もご健吟を祈る
選者一同



喫茶
グリル・ラウンジ
パーティ・ラウンジ
展示会場

喫茶・グリル・ラウンジ
御門
G Y O M O N

心齋橋大丸・そごう東入る
TEL 271-6684

郵番は書かない主義とひねくれる

後輩T君結婚

適当に悪友もいて披露宴

伊豆伊東市へ出張(十月二十五日)

「伊豆の踊子」という名の菓子も売出され

岳父急逝(八十一才)

納棺へひまご泣き男をつとめ

若本多久志

おむすびを料理屋で食う別の味

老眼鏡忘れた旅は窓により

すぐ眠くなりますよと禪の本をくれ

金ですむ話ながらも年の暮

古稀近し晴耕雨読何時の日ぞ

近 詠

長野県 高峰 柳 児

分譲地いきなりぬかるみ導かれ
ライバルの世評遠廻しにして構え
ガム吐いて本当に怒った声となり

今治市 月 原 宵 明

変てこな夢ばかりを見る初老
見えないであろうが空港振っておく
やられたと判ったところに繰る六法

大洲市 米 沢 曉 明

天井のしみそのままに文化財
鬼瓦ビルを仰いでくやしそう

和歌山市 秋 月 宏 方

新涼の庭俳人をよろこばせ
何をしてたべているのか赤い爪

名古屋 長谷川 鮮 山

焼却器煙りを上げて今日終る
ただ歩くことで若さが満ち足りる

小松市 山 上 千 太 郎

削り器を出る鉛筆の貌同じ
地蔵五体奇特な人の頭巾胸かけ

今治市 長 野 文 庫

順番の通りにならず小気味よい
群衆の中に孤独のちんどん屋

疲労

神経痛は

すぐ

おとり下さい

活性ビタミン複合剤

ハイベストン

全身倦怠・肩こり・腰痛
関節痛・食欲不振・便秘
胃腸機能の減退・疲れ目

5 mg・25 mg・50 mg



高峰秀子

川傍柳 初篇研究

(六十七)

前田喜代人 川端柳風

岡崎重義 故 高須啞三味

清博美丸 十府

藤井和雄 岡田甫

531 婆アの長咄し害分くれる也

一甫

岡崎 三會目。遣手婆、なかなか引き下がらず、もつて廻った長話——結局なんのことかと思つたら、おきまりの花一分を呉れということだった。

川端 一分貰つたら長話にケリがついた。

高須 金笑さん、一分のためには時間をおしまぬ。

小山の如くゆるぎ出て一分とり

一分やらずは刺ぎそうな婆ア也

一歩だけ遣手に尻をどたつかせ

丸・岡田 諸説につく。

532 内の雪隠へ隅田から聲帰る

泉河

岡崎 向島の梅若忌かねての桜見物などの帰るか、隅田川から連れは吉原へ繰り込むのに、入聲のかなしさ、つきあいもならず

真っ直ぐ帰宅。

清 入聲のみじめさは、今の人には想像もつかぬくらい。「隅田川向うの人は聲ばかり」(傍二五)

藤井 雪隠とはよく云つたもの。雪隠にはその家それぞれの臭いがある。我家との自意識が強く出ている。

高須 聲のかなしさ、みじめさもあるが、律義さも見おとしてはならぬ。いやいや家に帰るのではなく、自分で家が恋しくなつて帰る一面も多分にあると考えたい。

智用を紅葉の下でかぞへたて

智を追はへて白髭で一分かり

丸 贊。

岡田 但し、向島へゆくのは三月十五日の梅若忌に限らず、その沿岸に名所が多いので、四季折々の行楽の場所だった。

533 尻がちつとまがったで式百両

尻がちつとまがったで式百両

岡崎 持参嫁の相場はたいがい百両。しかし特別の場合は二百両もあったらしい。「目や鼻の代金として二百両」(安五満一)は人三化七の醜婦であるが、この淫奔娘も持参金二百両というところ。尻が曲るは逸れ道をするをいう。

清 「あの娘さん、いい娘さん、お尻がちつとまがって……」という童謡あり「それだから二百両附くと仲人いい」(九四)

藤井 「尻がまがる」について詳解を得たい。ただ欠点だけの話か。

川端 「怖いこと美女で一箱持参也」「帯をして後金の来るけちな嫁」(一九九)清氏引用句とともに身重とみてよい。顔で百両、腹帯百両、合わせて二百両と解する。「尻がまがる」は腹帯の所為で、顔も姿もわるい持参嫁。

泉河

高須 清氏のワラベ唄もさることながら、この「尻まがり」ビッコのためである。ビッコはかくしようないものなので、持参金も倍の二百両つけたのであろう。

前田 〓「尻がまがる」についていろいろの説が出たが、単に品行がわるいの意にとりたい。醜婦プラス不品行で持参金二百両。丸 〓賛。「尻がまがる」は高須説の如く解している。

岡田 〓同。ビッコである。なお古川柳には百両の持参嫁の句が多いが、百両は當時にしては大金、これは最高額なので二百両は醜婦にして、しかもビッコ。従って最悪の嫁といえる。もちろん五十両以下もあった。

534 国自慢下女六斉に市が立

五 扇

岡崎 〓毎月八・十四・十五・二十三・二十九・三十日が六斉日で、この日に仏を念ずると罪を滅ぼすといわれた。またこの日は梵天帝釈が降つて国政をみるとあって、殺生を禁じられる。各所に六斉の市といつて立ったが、八王子は特ににぎやかで有名だった。これをお国自慢に話している下女は八王子在から出て来ているのだろう。

高須 〓下女の在郷自慢に違いないが「市が立」を「立つ」と読むが正しいか「立ち」

と読むべきか？決定しにくいのではない。か。柳雨本は立ちと送っている。市が立つと下女が自慢するという見方と、下女の自慢は市が立ちだという考え方もある。

前田 〓礎稿に賛。「立」は立ちと思う。丸 〓同右。

岡田 〓岩波文庫に出版社の要請でフリガナをつけたが「市が立つんですよ」「市が立つて賑やかなんですよ」の略。「市が立つことを下女自慢」小生は「立つ」説をとりました。

535 しりがかいゝといゝ事を陰間聞

水 砥

岡崎 〓尻は陰間の商売道具だが、尻がかゆいという話を聞く俚諺があったのだろう。安永二年判「僧談口拍子」に主題句そっくりの小咄がある。

はやる陰間・廻男（まわしおとこ）を呼び「おいどがかゆふてならぬ」男「アイそれは結構なことでござります。明日はよい事をお聞きなされましょう」

高須 〓「耳がかゆいと良いことを聞」という俚諺をもじつたもので、陰間だから「尻がかゆい」とからかったものであろう。この「聞」も、聞きか聞くかどちらであろうか。我等の常識では聞きであるが、現代式には聞くとも読む。

丸 〓賛。つまらない句だ。

岡田 〓同。小生は「聞き」を探ります。

536 好きな後家ころんでも只おきる也

亀 遊

岡崎 〓転んでも只では起きない——というリンショクの語をもじつた好色後家の無料サービスぶりである。

高須 〓これも「転んでも只はおきぬ」俚諺の逆を言ったおかしみを言ったので、好きだから只でよいので、度重なれば「知るまい」と思つて後家の堅い顔

丸 〓賛。だじゃれにすぎない。

岡田 〓同。

色紙短冊
書画用品

大坂戎屋

丹 堂

を申セニセニ

第四回ゆーもあ特集

川柳における

ユーモアの要素

北川春巢

川柳といえは滑稽なもの、ということが多くの人頭にあることは確かである。滑稽とユーモアの心理的關係は、以前の「ユーモア特集」で考察したが、こんどはそのユーモアの要素について、少しばかり考えてみたい。

(1) 「たとえ」によるユーモア

川柳人の眼は仲々に鋭いもので、ユーモアのある「たとえ」をよく発見する。「たとえ」のことを文法上のことばでは「比喩」というが、私には「比喩」といわなければどうも感じが出ないものである。文法の本によれば、比喩には、(イ)直喩、(ロ)隠喩、(ハ)換喩、(ニ)提喩の四つがあるとのことだ。そのおのおのについては路郎先生が「新川柳講座」に書いておられるので、詳しい説明はそれに譲るとして、私が「川柳塔」その他手許にある句集などから探し出した句を例に引いて、簡単に説明してみたい。

(イ) 直喩の句

「如し」とか「ような」とかの語句を使っ

た句で、その「ような」ものが、種類がかけはなれていればいるほどユーモアを感じる度が高い。

大波の打ち寄すようにフラダンス 暁舟
作者はハワイに住んでおられる。なるほど映画などで見ると、大勢で踊っているフラダンスは「大波の打ち寄すよう」に見える。フラダンスを「大波の打ち寄すよう」と見た所にユーモアがあるのである。

来客へギョウザのように子は並び 一栄
来客へ、子供たちが並んであいさつのお辞儀をした所を「ギョウザ」と観察したのはさすがである。

春の宵魔術のようにすられたり 丁路
春に浮かれて歩いているうちに、財布をスラれていたのだが、いつ、どこでスラれたのかは分らない。「魔術のように」と見たのである。腹も立たないユーモアである。

(ロ) 隠喩の句

「如し」や「ような」という語句は使わな

いで、たとえを引くのである。そこにもユーモアの発見がある。

撫肩は淋し解けゆく氷に似 湧三
「撫肩」を「氷」と見立てた所にユーモアがある。

当選にバツタの姿思えかし 路郎
当選をした議員の、選挙運動中に頭を「ピョコピョコ」下げた様子が、バツタのようであったというのである。議員になってそりくり返っている人と、バツタとを対比した所はユーモアタップリである。

眼鏡屋は鰯雲ほど並べたり 薫風
ユーモアよりもむしろ詩情に満ちた句であるが、眼鏡屋のウインドウに並べてある眼鏡を鰯雲と見たのは隠喩である。一沫のユーモアもないではない。

(ハ) 換喩の句

ある事物の代りに、その事物と実際上関係のある名前を使うのをいう。大学生を角帽というような例で、ここにもユーモアが生れる余地がある。

禿と白一別以来二十年 不水
「禿」といい「白」といい、その人物の頭髮のことをいって、その人物を現わしているのだ。

コッポリがはずんで帰るボチ袋 操子
聴診器家を見るなど思えども 光郎

「コッポリ」「聴診器」が換喩であるが、その換喩のためにユーモアが感じられるのである。

(ニ) 提喩の句

部分をもって全体を現わしたり、逆に全体で部分を現わすのをいう。前項の提喻の一種と見られぬこともない。前の例の「禿」という一部分で、頭の禿げた人を現わすのは提喻ともいえるのである。また「めし」といって食事一般を現わすのも、部分で全体を現わす用法であり「パイ飲む」といって「酒」を現わすのも前とは逆に、全体で部分を現わす用法である。前の「ユーモア特集」に書いたコンニャク問答もこの種のユーモアである。

飲む話あっち向いてる間にきまり 春 果
この「飲む話」は「酒」であることは、川柳人ならどなたにも理解いただけると思う。
三味線が音痴の前へ来て座り 酔 升
「三味線」が「芸者」を意味していることもどなたにも理解できよう。

サインコサインそろそろ親に口答え 不二
「サインコサイン」は高校生であろうか。読者によって色々にとれる所はコンニャクである。

(2) 擬声語・擬態語のユーモア

擬声語や擬態語は川柳独特のものではないが、これによってユーモアを感じさせる句も多い。

「ことばの宇宙」という雑誌の昭和四十三年十月号に「擬態語」というテーマの特集があり、その中で安本美典氏が「現代文学にみる擬態語」という一文を書いておられる。安本氏は、三島由紀夫氏がその著「文章読本」の中では「擬音詞」ということばを使っておられるとのことである。「擬音詞」も「擬音

語」も同じものである。また同誌上で大久保忠利氏は「音マネ語」ということばを使っておられる。

三島氏は擬音詞について、擬音詞は日常会話を生き生きとさせ、それに表現力を与えるけれども、同時に表現を類型化し卑俗にしようとする。また擬音詞には抽象性がないので、言語の本来の機能がない、墮落したものであること、さらに子供と女性の文章には擬音詞が多く、女性の作家ではそれが巧みに使われると女性独特の感性的、具体的世界を読者に伝えうる場合があること、などを述べておられる由である。

三島氏の文章はただ擬音詞に関することだけで、擬態詞については触れておられぬようである。川柳においては、女性ならずとも、川柳人の鋭い耳には擬声語が、鋭い目には擬態語が特別に捕えられて、句に一種独特の色彩を与えているように思われる。擬声語に抽象性のないことは事実であるが、それをうまく捕えた場合には名句となり、またユーモアの句ともなりうるのである。私は擬声語・擬態語も川柳のユーモアの一要素になるものと思っている。以下に例を示してみよう。

じよろじよろと胡瓜がのびて雲の峰 水客
「じよろじよろ」という擬態語は作者の感覚であり発見であって、この語のためにユーモアをさへ句に与えているのである。
踏切はジンカジンカと夕焼ける 水客
「ジンカジンカ」の擬声語がこの句の命であるがユーモアを感じる人もあるに違いない。

親おろろおろろ受験の日がせまり 生々庵
「おろろおろろ」がいかにもうまい。

(3) 擬人法のユーモア

擬人法とは、人間以外の生物や無生物を人に擬して、詩文の力を強化したり、味を一層効果的にするものや、これも川柳独特のものではないが、やはりユーモアをかもし出す一要素である。川柳には比較的にこの手法が多い。以下に例句を列挙してこの稿を終りしたい。紙数の関係もあり、いちいちの句の説明は省略するが、読者はよくそのユーモアの味わいを鑑賞して頂きたい。

ボストンが先に席とる一人旅 鉄 舟
逢引きへ鈴を落して猫戻り 一 栄
気のきかん骨法衣着た喉に立ち 句楽坊
仁王さんあぐらをかいてみとうなり 多久志
春日遅々として仁王さんねむくなり 白柳子
古稀らしい魚も交った水族館 きさ子
長靴の片方どうしてもこける 薫 風
ドロドロと貧民窟へ陽が落ちる 豆 秋

(註) この豆秋氏の句のユーモアは「ドロドロ」という擬態語(前項)の効果も見落せないと思う。

退職金の端数が飲め飲め飲めという 清 生
しなびても土筆袴はついていた 梅 瓢
水引きをかえて嫁入りさすつもり 里

秋田実主宰・不二田一三夫編集
月刊「漫才」 定価 百円
発行所 大阪市生野区勝山通六ノ七九 六円
電話大阪(七一八)三二一八

大阪市 後藤梅志

呼び捨てにすると甘えてくる年増

仲居さんである。さして馴染みでもないが、よそへ行く台の物をおろし、べったり座りこまれてすこしまごついた。

室戸市 奴田原紅雨

生きている訳をきかれたのに困り

新憲法は国としての生き方を示しているが、個人の人間としてのあり方はどうか？ 生きているわけについて自問しても困らされる。

大阪市 今西章雅

玉砂利の筋のよう薄い毛をならし

モデルは友人、未だに養毛剤で軽くマツサージ、ポマードで慎重に頭へならしている。今年から敬老会名簿に載ったことが不服らしい。

大阪府 高津徹也

できすぎた賀状奥さんもらってた

今年にA君に異変あり。女性字体のこの賀状。そのすみっこにA君の字で注釈あり。暮に奥さんもらったと。年始は遠慮しておくか。

宝塚市 小畠無聖

ちよっぴりと殺し文句の調味料

ナーに女と逢えば肩でも抱いて、殺し文句を軽く一ふりくらわしや、それでコロリさ。殺し文句って知らねエ、それじゃ話になんネ。

諫早市 川岡靈眼子

妬された代償を貰う千里眼

身の上相談ともあれば色んなのがくる。女三人から持てすぎて困る……どれに定めるかに迷う者への判定。

大阪府 室谷鉄舟

丸い膝出して流行追っかける

若さを発散さすミニ。幾歳になってもポイントピチピチが感じのいいもの。昔はともも見られなかったが。

和歌山市 菅井智水庵

消しゴムを借り答案の知恵も借り

「オイ消しゴムを貸してくれ……ありがと、三番の答いくらだ」誰にでも多少は身に覚えがある。若き日の学園生活の一コマ……。

高槻市 若柳潮花

くしゃみしたような顔でも旦那はん

お婆さん曰く「旦那と色とは別です」と、粋な殿御はとかく色の方に廻っているらしい。それは女の身勝てか。

出雲市 原 独 仙

それからの二人を大地微笑みぬ

草に臥て語り合う若者。二人のために世界はあるのとかなんとか。甘いささやきも、すべての行動もそれは大地のみが知っていた。

大阪市 石 倉 旅 風

人生を問えば山僧茶をすすめ

こっけい、おどけ、かいぎやく、上品な洒落。果してユーモア味の句か、批評家は鮎を崩して食う如し、とする私である。

守口市 羽 原 静 歩

トンカツで飲んで政治がなっとらん

四十二年二月、明和の句会で雑詠として抜かれた句。選者の河相すゝむさんが亡くなられたことを思うと、ほんとうに感無量です。

倉敷市 野田素身郎

張り合って無理して結婚して敷かれ

今年は夫権の拡大を計りたい。が、敵は子供を味方に既得権を守るだろうから、前途は暗い。初五「張り合っ」てはフィクション。

大阪市 中 川 滋 雀

ベテランの車掌にお客叱られる

こんな車掌になると鼻にかかった早口でお客はまるで荷物なみにあしらわれ、そのくせそつのない遵法勤務ぶりには頭が下がる。

岡山県 江 国 幽 谷

富士山を見上げる顔が口をあけ

かれこれと人のことをいいながら、さて自分はどうか。まだ口あけた位ましです。然しどこかゆるんです。

鳥取県 清 水 一 保

腹の出た方を社長と思ひ込み

地位ができれば堂々としてくるものです。腹が自然にできて重役タイプとなる。然し逆に秘書氏の方が堂々とした場合もある。

大阪市 市場 没 食 子

下手な字であの人らしい返事が来

愚筆悪文、ずばらが筆不精の因。たまの便りも用件は四、五行止り、拜啓と敬具が笑わせる。あの人のモデルは大学下宿時代の二男坊。

倉敷市 本 田 恵 二 朗

天下泰平薄いおつむがよく喋り

私の自画像である。柳友達は私のお喋りを恵二朗節と付けてくれた。それをいいことにして、齡と共にお喋りのピッチをあげている。

高槻市 傍 島 静 馬

日々好日ど忘れ笑う老夫婦

ばあさんや、あれどこにあったかなあ、あれで何んですねん？ホレ、あれやないかいな、年齢はとりたくないものです。

倉敷市 井 上 旭 峯

見舞客医者のとなりで灸を説き

医薬や漢方薬を服用している病人。医師の往診中に見舞客が来、その口から灸の効能話が飛び出し、先生も微笑。

下関市 桜 川 不 水

夷みずや統制力はなかりけり

火野葦平ではないが、私の若い頃はよく糞尿の句を作り、又や・かな・けりを引用したものです。何か抵抗があったのでしょうか。

大阪市 本 多 柳 志

視察団あとのまつりを飲み歩き

「ひどくやられましたね」「町の予算は全部のまれましたよ」「洪水にですか」「イヤ政府の視察団の先生方ですよ」

和歌山市 垂 井 葵 水

クーポンが風邪ひいたまま乗せてゆき

精進が悪かったのか頭が重い。宿屋はもう到着客の、準備で何だかよそよそしい。仕様がな、バスの時間だよっこらシヨと立上る。

兵庫県 河 原 みの る

人混みを吸い上げて吐く跨線橋

此の偉大な力に操られた人間共は、身も心もふらふらと吸い上げられて、聊の自我もない無力な一浮遊物質に過ぎないのである。

岡山市 服部 十九 平

月が出た出たと音痴も首を振り

全くの音痴、炭坑節だけではどうやら唄える。唯一の十八番となると、この音痴も首を振って和している。(私のこと、自嘲)

今治市 越智 一 水

昼のバー素顔の女のように見え

太陽の照る昼のうら街を川柳人はあるく。川柳眼は、そこでこの句をキャッチしたのである。

京都市 松川 杜 的

神主もわが社を褒めて式終る

厳肅な祝詞をあげて、新郎新婦に永遠の契を誓わせた神主さん。一応行事も終った処で我社のPRもちよつぱり、とどこおりなく式が終る。

奈良市 村上 春 巳

わんぱくに育て頭を下げにゆき

親ゆずりのわんぱく、親父自身にも責任を感じてご近所に行き、それも再々だから堂に入ったものである。

平田市 久家 代 仕 男

満場一致つむじ曲りを役に推し

他人のなす事には同調出来ぬ鼻つまみ者。難航の後に満場一致推したのである。人の立場を解せぬ人間にはなり度くないものです。

守口市 村田 瓢 太

一生のへまえらいのに惚れちまい

美男必ずしも美女と添えるものとも限らず、美女も亦同じ。そこがそれ造花の妙。若気の到りこれだけが女と一途に惚れこんだのが運のつき。

鳥取県 森田 布 堂

宇宙から帰り女房に飛びつかれ

宇宙服を脱いで無事に帰った夫を迎えてのよろこびの表現は、しばし無言のキッスであった。但し地球の裏のこと。

小松市 馬場 魚 山

バスの客バスの来る方へ向いて立ち

冷たい風はどす黒い雲を呼び、やがて雪となる。勤めに出る朝、勤めから帰る街中でいつも見る風景である。

出雲市 尼 緑之助

ベレー帽秋をマンガの顔で来る

ひょうひょうとして、友来る。
又たのしからずや。

防府市 弘 津 柳 慶

録音へ驚意地にもなかめなり

飼主の狼狽した顔、録音者のイラ立ち、鶯は、ピョン
ピョンと枝から枝を渡って、せせら笑っている。

大阪市 川 口 弘 生

足の裏似てると親子で笑い合い

寝ていると大ききで区別するような、中二、小六、小
四の三人娘ですが、起きていると父似、母似とうるさい
事。三人とも甲高の足でした。

奈良市 宮 口 笛 生

さかさまに押ししてもうた出勤簿

ああ、えらい事してしもうた。誰か消しゴム借してん
か。あは消しゴムで消えへん、消えへん。ほっとけ、ほ
っとけ。

京都府 大 鶴 喜 由

女の気女に聞けば無理という

女は誰にも明かさぬ秘密を貯える。それがお色気にな
ると嘘と本当と混ぜっこにして喋る。だから女のわたし
に聞いても無理だ。

大阪市 天 正 千 梢

新薬におされて鰻のきも売れず

チャネルをひねれば精力剤、栄養剤の宣伝で素人が
薬の知識豊かに成り、おいしくて栄養のあるきもは忘れ
がちになりつつある昨今。

高槻市 福 田 丁 路

しんがりで走る我が子に苦笑い

体育祭で走る我が子に対し、熱狂的声援も空しくビリ
余りの熱狂振りに、周囲の人々の目、目、目。テレ笑い
してコソコソと雲隠れ。

兵庫県 大 江 秋 月

足の裏見せて海女さん金をとる

海女の実演を見るのは、団体でも男が断然多い。黒い
肌の艶に豊満な乳房もゆれて、ザンブと姿態が水煙をた
てる。

大阪市 正 本 水 客

ひらひら泳いで生きているのを確めてみたい

食べて寝て眼がさめるだけの繰返しで本当に生きているのかも分らない毎日、大きな赤えいのようにひらひら自由に行動できたら……。

倉敷市 水 粉 千 翁

迫力がないので拍手して戻り

期待の裏側からほめたようにくさした人の悪さもユーモアというのか。

高石市 谷 沢 好 祐

ハイ下宿代と女房殿に出し

初老のサラリーマンなんて所詮、高等下宿人なんですなあ。ハイ……。

岡山県 横 山 一 声

素足かと思えば女絹をはき

ミニがだんだん短くなってゆく、また靴下が全く肌と同じ色で素足のように見え、男の目を楽しませてくれる。

名古屋市 吉 田 水 車

改札はかるそうに行く大荷物

今も昔も列車を飛脚代りにする、割に緩大な改札でもそこは人情、至極軽るそうにヒョイと持ちかえて虎腔るのがれる思いで通る。

姫路市 隠 岐 不 醉

弁解の度毎友の名をかえて

どうしても、友の名を借らねば弁解が通らない。悪いけど今日は君の名を借る、次はS君の名を借るから無断拝借を許してくれ給え、君。

和泉市 西 岡 洛 醉

ほろ酔の満足天下取る気なり

仕事疲れの空腹が五臓六腑にしみる味、いい御機嫌——いいから、いいから全部俺にまかしとけ、大丈夫ですか後の始末は……。

大阪府 岩 田 美 代

三面鏡五つサバ読む顔が出来

高二の息子曰く「最愛の母よ無理しなさんなと」。

あつとぎどころか文学をこころさし

とかくこの世というものは、思いのままにはならないもの、青春のはけ口に覆面して角棒をふるうより文学の方がましかも知れない。

大阪府 清水 白 柳

親ゆすりことわり度い程子沢山

終戦後帰国、婚後十一年目の第一子、十年間に六人の子、長女、二男、中毒死。残る四人が私の財宝。昭和三十三年以後産まれず。

鳥取市 藤 本 礎 山

安来節障子の影へ笑わされ

宴たけなわにお盆を持って踊り出た飛躍型。
安来節どじょうは女性の膝の横まで飛んで来てキャッ
!!その声に障子の影はみんな大笑い。

芦屋市 丸 川 初 甫

変人のどこが魅力か友が寄る

若いのに理髪嫌いで、無口でハッキリしない息子。それなのに友達皆生きのいいセンスのある人ばかり来る。どこが魅力かわからない。

大阪市 小 林 ト メ 子

春や春犬も思いっきり寝そべって

春ともなれば猫は鼠を獲ることを忘れ、人は借金のあることを忘れ、犬は吠えることを……。平和とはいひですよネ。

京都市 都 倉 求 女

漫画めく顔で動物にも好かれ

とかく美人より少しくずれた顔の持主の方が誰からも愛されるもの、まして親近感を持つ動物に於ておや。

岡山市 川 端 柳 子

義足とも知らずに馬鹿な蚊がとまり

夏に入院していたとき、義足の療友と話していたら彼の義足に蚊がとまった。だが彼れは追うこともせず、また追う必要もなかった。

岡山県 藤 原 秋 月

ついてない顔で鼠の生取られ

黒く澄んだ鼠の目がかごの中から話しかけました。「ぼくはついてないんだあ」天井では彼の仲間たちが走り回っています。

枚方市 宮 川 珠 笑

大阪市 山川 阿茶
金魚さえ乗る飛行機にまだ乗らず

こわいから乗らないのではない。
ただ、機会がないだけ。
金魚より「あかたれ」といわないでほしい。

富田林市 川端 雲 楼

宿直の朝寝生徒がもう来てる

宿直の夜は担任の仕事の整理、夜更けに就寝、ラッシュの夢からさめたら、もう生徒が来て騒いでいる声だった。グッスリ寝たなあ！

大阪市 酒田 清 子

夏場所に乗と相撲取りました

姉（一栄）が交通事故にあう。救急車から運び出された時、人間としての原形がくずれてなかったで、これなら大丈夫と思った。

竹原市 小島 蘭 幸

好きなもの言えと千円以内なり

「千円以内」に
愛情があり。
軽いユーモアがあると思うのですが……。

倉吉市 奥谷 弘朗
有線は豚が出たからすぐ帰れ

農村も近頃は便利になったもんだ!!
豚が出たから、早く帰れと有線放送を使って夫を呼んでもらっているのである。

大阪市 吉岡 美房

酔っぱらいから憲法を聞かされる

自分の帰るところもわからないのが、大声でわめく御高説を、苦笑しながら聞きするのの仕事のうちである。ああ……。

和歌山市 中筋 三幸

腹巻を腰まで下げた探し物

今夜はとても忙しかった。屋台店へ首を突込んだ時に宝くじを買い取ったのを思い出した。腹巻にしわくちゃになっていたのだ。

大阪市 加藤 貞山

黒髪に染めた老妻気をもませ

共白髪のままなら気にもしないが、片方だけ途中変更はヘンだ。おそ蒔きだが共黒髪にでもするか。

気まぐれな社長手品を習い出し

この社長さんどれもみなちよいづりばかり。この頃は奇術の方へ宗旨変えたか、宴会へも小道具持参という凝り方である。

大阪市 大坂 形 水

一人旅家で読まれぬ本を持ち

家で読まれぬ本といえ、どんな本か、子供や妻に見られると都合の悪い本、そんな本を読んでこっそり楽しみたいのが一人旅。

堺市 城 一 舟

倒産のうわさスピッツよこれきり

貴婦人のようだったスピッツ。
てこ入れをしてあげたい。
されど我背広も色あせている。

松江市 中 川 晃 男

トントンと事が運んで危ながり

安物より高値の方が売れる御時世。人間一応は疑ってみたいもの。余り調子がよいと後のたたりがこわい。だまされるのはこりた。

出来心煙突男腹が減り

NHK川柳選評四十三年十一月二十四日(日)中島生々庵選「出来心」で第一席として入賞作品。

藤井寺市 西 い わ を

も一人の巡査が無灯を承知せず

最後まで、済みません、済みませんの連発も結局もう一人の息子のようなボリには通じなかった……。

竹原市 山 内 静 水

雨落ちて来たのに夜の部も並び

たいした人気歌手でもないのにと思うのは私だけかも知れないが、昼夜二回一日限りの興業とあって昼に続いて夜の部も長蛇の列。

呉市 林 野 甦 光

片道はおんぶさされる孫を連れ

初孫におじいちゃんといわれると、年だぞときめつけられるような気がする。しかし今日は孫が来ていないかなあと家路をいそぐのです。

神戸市 仲 どん たく

悪酔いに幹事が一人逃げおくれ

大阪市 金井文秋

悪酔いしよったなー、どうする。まさか放つとしても行けんやろ、気持の落付くまで一人残つてやろうか、それじゃ君頼むよ、おさきに。

紹介した友と新妻うまが合い
大阪市 宮尾あいき

美人の新妻を悪友に紹介したら忽ち意気統合。悪友の帰った後、心おだやかでない主人へ新妻が云った。「貴方あの方いい人ね」

立っているとき休んでる馬の足
青森県 工藤甲吉

「国民川柳」に三太郎選で抜けたもの。四十年近くも前の句が今頃どうして頭に浮かんだものか。それ程のユーモア句とも思えぬが。

拵つてあれが祇園の妓やそうな
東大阪市 久米奈良子

粋すじの和服の着付けにもピンからキリ。この句から美しいひとをご想像ねがえれば幸いです。

もっと空気をもっとユーモアを川柳へ
大阪市 福井野迷路

もっと空気を、もっとユーモアを川柳へ。厨川白村先生に三高時代教えを受けた。先生は英語のユーモアについて講義をされたが、このスペースでは何も書けないのが残念。

頭から足までざっと見積られ
大阪市 河井庸佑

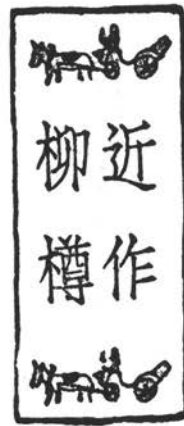
正月から新調ずくめ、結構ですね。へえー暮れのボナスがそんなに出来ましたか。しかしその靴、千五百円ぐらいですかね？

大あくびしても妻の座ゆるぎなし
香川県 三井酔夢

二十年と云う歳月はおそろしい。恋をして、愛して、退屈して、諦めて、しかもこのふてぶてしい自分を、許せないとも思う。

鯛焼きの出世は箱につめられる
大阪市 不二田一三夫

家の者の誕生日に、タイ焼きを買って帰り「焼いた鯛やで」と云ってわたしたら「なんでもみな漫才にしてしまう」と怒られた。



西尾

栞選

鳥取市 藤 本 恵 子

白い杖シグナルどうり歩いてた
ベレー帽の小父さん院長と知らなんだ
いつのまか家族になってた迷い猫
ごちゃまぜで父おもしろい千一夜
初めから負けて笑えばほめられた

島根県 堀 江 正 朗

寝た振りで母娘の話おもしろし
偉くなつてほしい息子の靴磨く
気にするなと気になる話置いて去に
見えぬから欲の範圍もこれっぽち
みの虫のような昼寝も秋のもの

大阪市 河 内 屋 源 七

押売のプライドさつさと荷をまとも
ジャンジャン横丁織田作のペン美美子のペン
くされ縁同士が参る戎さん

別れてからの男の身を案じ

島根県 小 砂 白 汀

秋風の姿かたちを舞う尾花
レンコンの穴の配列他意はなく
棺覆うて評価を受けるもの持たず
沈黙は策あるようにも受けとられ

姫路市 前 田 芙 巳 代

パフの汚れをかくして処女という
箕 面 公 園

一枝あきらかに燃ゆることを否定
一ときは紅葉の色に溶ける人
冷ややかにもみじ見下す杉木立

松江市 村 松 醉 歩

寡婦の紅うちのこどもが不潔がり
平家村ルポ栗餅のうまかった
平家村迷った鳩を可愛がる
平家村安泰みどりに包まれて

東大阪市 坂 東 若 芽
連想の翼よ蒼い空へ飛べ
もう燃えぬ心でマツチつけてあげ

秋風へ和服の似合う人と佇ち
川底の流れにも似て父の愛

大阪市 小 谷 葉 子
燃えるもの燃え 女の仮装
虚偽なき紅葉青春を包む

不信を打ち消しうちけし愛つる

とり年

鶏鳴一声胸はって立たんとす

倉敷市 藤 井 春 日

我が社にも彦左衛門が居て安泰
地位と金赤い思想を保守に替え
割切つて見れば世間も面白し

岐阜市 市 川 鱗 魚

お断りするには酒がすぎている
屋台の灯デモの味方のコップ酒
宿浴衣女の壁を薄くする

大阪市 和 田 痴 亭

一徹に生きて老松の幹真直ぐ
蟠螂もわれも年老い枯色に
野仏のおん鼻欠けて草紅葉

大阪市 江 城 功 雄

高杉鬼遊氏川柳塔賞受賞(二句)

柳友の句を讃えて秋の夜が充つる
実姉還暦(一句)

パフ叩く暇もなかった長い坂
妻と来て宝石店は素通りし

宮崎市 野 口 卯 之 助

長話受話器の妻を叱りもし
前向きの姿勢世間の風あたり

貧乏の裏を返せば孤独の詩

鳥取県 鈴 木 村 飄 子

草の実の抵抗服にへばりつき

腕章に五尺五寸を縛られて
手を伸ばしや大山の雲掴めそう

大和郡山市 中 内 孚 彦

受験受験で息切れのした人生
酒悲しさめてみじめさつのりける
死んだらか いやもうちよっと生きておこ

下関市 志 賀 木 石

包装紙の気休め許さぬセロテープ
事故防止地蔵に頼む芸のなさ
取り締りにも学割がある如し

寝屋川市 福 富 隆 子

承久を思わす学生スト警官
内職へおたのみしますと自家用車
乳母車歩行器三輪子沢山

愛媛県 河 本 雪 男

秋晴れのこの一日は俺のもの
主導権妻が握って日々平和
中卒は三顧の礼で迎えられ

愛媛県 嶺 本 満 子

病弱を詫びて今宵も背なを向け
春雷がとうとう夫婦にしてしまい
一言が多い私へ自己嫌悪

竹原市 生 信 笑 子

さようならそれだけ言えた過去でし
許し乞う身に潮風のまともなり
紅をひく女ひとときのしあわせ

倉敷市 小 野 克 枝

四十坂何を怖れている躍
男の言葉が返ってこない十字架
温かい顔に背信うずくまる

島根県 堀 江 芳 子

日の丸に泣けるわたしの血がうれし
手の荒れをそっと隠した割ぼう着
捨てきれぬ過去よ女は弱いもの

河内長野市 井 上 喜 醉

借金で飲んだ酒では口説かれず
頑固さが抜けて親父も歳を知り
負けてきた夫へ妻は笑うだけ

京都府 福 村 飛 龍

老眼を妻の方が先にかけ

湯豆腐にいもぼうやっぱり京の味
ピンボケの方が一番よいポーズ

和歌山市 ふきあげ 虎 城

泣き言の割に平気な顔で去に
海にむく部屋も馳走と案内する
荒海を暖房列車から眺め

今治市 原 田 輝 親

此の道の果てに海あり風光る
宵葉を貼ってもたせる齢になり
菊の水打って改札口を開け

竹原市 時 広 一 路

もう一度やれば古い逆に出た
救急車去ったら何も無かったよう
図太さが今日頼もしく見えてくる

東大阪市 宮 西 弥 生

サングラスで見られたくない古都の秋
もう逢わぬ心の糸がまだ切れず
ハイミスのぜいたく舶来趣味に生き

岡山県 目 賀 芳 月

別居する条件つけて来てもらい
啄木を真似て手を見てどうする気
横車押すのに万障繰合わせ

神戸市 来 住 タ カ 子

まだはずみます傷だらけのまり
ガラス這う雨をみつめる夜の顔

逢うだけに心を碎くワイングラス

京都府 明

嘉彦

高島の暦が母のあとを押し

ころろまで売らぬ笑顔を見せておく

いやいつの間に撮らはった笑い顔

京都府 内

海敬太

すすみゆく辻麗子に

青春の旗革命と恋に燃え

河相すゝむさんを悼む

科学者の死空も悲しい歌奏す

こっぼりの恋に八坂の塔は雨

竹原市 出

島静波

加勢した後は巻きぞえ食っていた

止ってた時計誰かがかけてくれ

無我夢中嘘のひとつも言っていた

大阪市 堀

口欣一

ハイウエー甲州街道の名が残り

東京で三日過した手の汚れ

背番号も忘れられて来た落日

鳥取市 福

山貴恵

運動会ビリまで賞の幼稚園

無遠慮に上り込むのが居て嬉し

敏感に音をとらえた猫の耳

鳥取市 藤

本和宏

百六才知事に握手を求められ

飼うてみりゃ小鳥もムードわかるらし

鳩が飛び風船が飛び大会旗

鳥取市 藤

本鎖也

未だはずむ息へからんだインタビュ

強情がレントゲンでは見えなんだ

向き合った窓へ団地の見栄を干し

竹原市 三

宅不朽

白痴美のかなしからずやイヤリング

恋成った余勢双子も生んで見せ

堺市 藤

谷象園

鳥取でシルクロードの旅思う

触れたなら折れて了いそう芸者の手

羽曳野市 榎

本吐来

ラーメンの腹正直に子は帰り

極楽が信じられない火葬場

大阪市 木

村濁水

新聞を読んではるはずが高いびき

松茸も秋刀魚も匂いだけの秋

大阪市 黒

田真砂

アンゴラの手触り母の胸恋し

カーオフイズに心酔わせて虚しい夜

諫早市 原

田明春

温かいおでん女房のような味

垣根越し隣り呼んでる俄雨

八幡浜市 別

宮すき

左眼のウィンク今日は駄目といい
ゴーゴーもならい大学卒業し

仙台市 平野光道

温泉の宿の非常口たしかめておいて飲む
ドアー音たてて閉めても独身寮

米子市 林瑞枝

騒音の職場手まねで事が足り
自動ドアー別れの握手へ容赦せず

米子市 八木千代

酔うて寝る夫へ母めく眼ともなり
人妻の理性保って落葉踏む

八代市 船木史朗

この人の何所が恩賜の銀時計
肉身の欲目診断を曇らせる

東大阪市 竹中肖二

結婚の女優に芸の中ができ
紅葉狩り携帯ラジオに追い越され

東大阪市 竹中綾女

死んでから名誉市民になる皮肉
入道雲ゼット機に真中破られる

竹原市 脇本政己

トロロテンのように四十へ押し出され
いたわりもなく鼻すじが通り過ぎ

東大阪市 落合思月

としよりが居てままならぬ子のしつけ

設備費と云う寄附のいる幼稚園

八尾市 高杉千歩

愛たしかめる女白菊生けてまつ
霜月の百度石にもけつまずき

七尾市 松高秀峰

酔払い課長の寝顔頂けず
寝ただけで疲れがとれた頃もあり

松江市 吉岡通児

予約札俺にもほしい品だった
子に書ける字があり障紙も唐紙も

守口市 岸本豊平次

病人が素直になつてあわてさせ
彼岸花父の墓には赤すぎる

堺市 羽田一扇

甘えてる妻を初めて突離す
愚痴る輪へ何時しか俺も仲間入り

出雲市 板垣草丘

麦藁で風呂焚く音も里のもの
人さらいのように父親の手にひかれ

大阪市 藤田頂留子

移り気な空へモミジの色映えて
雑念を払う読経の声高く

河内長野市 森本黒天子

年寄りの冷水みんなに利用され
日なたぼこ籠の小鳥に話しかけ

和歌山市 増 田 次 章

他人ごとなら世間に沢山ある話
一番電車そこには別の世界あり

新居浜市 村 上 水 軍

年末のボーナス街で妻を待ち
宿直は机の上に足を揚げ

大阪市 島 野 県 吉 郎

毒だんご除ける嵐にお手を上げ
手に扱めば千々に砕けた池の月

大阪市 半 田 夏 生

松島は雨に煙った島巡り
瑞巖寺岩に刻んだ仏たち

鳥取市 川 崎 秋 女

珍客へわが家のベース乱される
掃きよせる落葉昨日の色でなし

熊本市 北 川 一 進

三ッ指もお見合だけの顔で来る
政治犯恩赦の方も御見通し

堺市 斎 藤 亜 也

無口者といわれそれでよかったと思う
ジंकスをけなしながら気にしてる

大阪市 西 本 保 夫

ポケットに突っ込みビラはもらわぬ気
真っ先に改札を出る心地よさ

島根県 大 森 孝 華

待てしばし理性へ奥の手おさえられ
なごやかな茶の間へ孫の芸がわき

河内長野市 小 川 耕 人

ホゴにする約束ホステス念を押し
口止めの念を押し過ぎ洩らされる

尼崎市 平 井 露 芳

眼鏡屋は眼鏡をかけて眼鏡売り

ルーキ新一恐喝事件

そろばんの名手も誤算の珠弾き

大阪市 松 岡 茶 々 坊

人情と義理で明治の心意気
親らしくなつて娘は子を叱り

小松市 四 方 天 弘 美

酒の勢借りて闘志を宣言し
勝負する男に非ず不精ひげ

羽咋市 三 宅 ろ 亭

鰯でよしズワイでいける能登の味
今月もストのわが子へ送金し

大田市 藤 田 軒 太 楼

ママゴトの会話にもある物価高
問いつめてみれば我児にある善意

大阪市 奥 川 継 之 助

子の地球儀でメキシコの位置を知り
人妻と聞いて対話の角度変え

姫路市 大 久 保 大 夢 子

走って出ても市場帰りは同じ二時
便所から見た月去来忌の月だった

尼崎市 中 谷 利 美

人間が造った神の罰をうけ

マイホーム主義が無難と不肖の子

大阪市 長 田 好 生

灰皿へ煙草もみ消し席をける

平凡な暮しへカーテン替えてみる

呉市 横 田 英 詩

本心をつかれ視線が定まらず

理性忘却眼前真紅の唇

高知県 山 川 勝 子

ネックレス貰って似合う服ねだり

お見合いに共働きを言い出され

大阪市 河 原 林 比 呂 路

仲直り出来て女に朝の音

口ぐせの儲かりまへん貸さぬ肚

愛媛県 渡 辺 あ き ら

退職、嘱託就任

旗を巻く仕儀にもならず髪を染め

ハッピーエンドはしばしおあずけ

鳥取市 有 田 鹿 の 子

石段を登る五十路へにじむ汗

真実は神様だけが知ってくれ

島根県 吉 沢 山 我

倅な暮しに妻の手内職

弁当と天気が気になる遠足日

岡山県 川 端 晴 女

文化の日明治偲んで白い衿

裸木も確な後芽残しとき

大洲市 堀 内 眺 風

お姑に嫁のしくじりいたわれ

ご破算のきかぬ人生古稀となり

島根県 志 賀 美 栄

朝参り心新たな杉木立

錦着て山絢爛のフィナーレ

新潟県 高 野 不 二

二日酔しみじみめしのうまさかな

子の苦勞子のない苦勞にうらやまれ

米子市 源 氏 勝 久

自由主義敬語も知らぬ子を育て

俺よりもハンコの方を重視する

鳥取市 谷 尾 透 風

物価高知らずねずみが食い荒し

会計の金でないのに叱言添え

京都市 藤 本 征 山

征服へお山なんにも言いしらず

ストラックスだから逆立ちしても見せ

大阪市 有 信 吐 痴 男

最果ては此処までと濤が押している

妙めてる音の割には味がでず

鳥取市 河 口 忠 志

子のリレー家族ぐるみの声も駆け

京都府 片

山 富 夫

自然美をくずし文化の道が延び
あきらめて帰る他なし待ち呆け

豊岡市

不 二 本 和 久

ベレー帽なんとか似合う歳になり

小父さんと呼んで警戒して呉れず

鳥取市 米

原 一 稔

子の為と暮しに耐えた花鋏

暗示などかからぬつもり気にかかり

鳥取市 中

田 吉 春

それとなく暗示かけ合うのも女

運動会吾娘のバストが目立ちだし

鳥取市 山

口 宴 司

若者の姿が減った村祭

見栄張った後は赤字の日が続き

鳥取市 藤

本 佳 女

慰めるつもりが古い傷にふれ

眼を病んでから敏感な性となり

高知県 長

田 正 一

秋風に吹かれてまよう赤トンボ

さびしくてもっているなり曼珠沙華

鳥取市 夏

目 葉 舟

月並の悔状となりおわり

そり返り歩き踏み込む水溜り

香川県

西 山 綾 子

和歌山市 かりやみさを
はほずきの夕陽をはらんだ合唱
病み止めきかず百舌鳥高音

石川県

国 分 狂 興

読経よりガイドのうまい僧となり

奢られたなどと御機嫌なる帰宅

竹原市

森 井 菁 居

妻よ子よ男の意地を笑うまい

邪教とも思えなくなり病み疲れ

羽曳野市

麻 野 幽 玄

年賀葉書買った帰りに筆を買い

インターホンの第一声が検針員

広島県

南 条 露 声

あなたとは呼べない俣のハネムーン

転げたるままであたふた十二月

泉佐野市

大 工 静 子

レントゲン掛けた時だけ煙草やめ

お人よし一から十迄話する

鳥取県

谷 無 閑

落葉して隣の窓の灯がこぼれ

境遇が同じく同想の句が生れ

島根県

中 島 英 子

家中を和やかにする孫の口

手料理へ明治の母は目分量

お互に安眠防害するふた子
双生児喧嘩に負ける方が姉

大阪市 大池芳

金婚の旅路に登る善光寺

藤村の史跡の萩は今さかり

泉佐野市 大工チヨ

乱れ咲く菊仏壇で色が冴え

金ためるためると世間を狭く生き

大阪市 柳生柳生

店じまい昨日限りが今日も居り

足音にはずむ心がよその家

小松市 村井恒二

もう齡と若いもの等に花持たす

抱持つ手につくづくと年を知り

羽曳野市 樋口一峯

療養所漬物つけまでおぼえて来

ドン底にもある喜びの暖かさ

大阪市 大池聖川

信濃路の旅

信濃路は赤いリングに草の屋根

バスの窓手を出しや届く赤リング

善通寺市 伊藤藤歌子

働く事の意欲に燃えて今日も行く

お祭りも明治と共に遠くなり

大阪市 花田繁子

子より親がハリキっている運動会
京言葉あらくれ男がすなおなり

大阪市 鈴木生仏

生国をはめて一度も帰国せず

入れずみは終い風呂という地位が出来

大阪市 松岡進

外科医では仏滅友引まったなし

方言も明治の人だけのものになり

岡山県 浜口志賀夫

ふる里の祭便りへノスタルジャー

八海事件に思う

疑いもすっかり晴れて菊日和

鳥取市 近藤秋星

あんまり早く来てもらっては困る冬

敬老の日だけ百才まつり上げ

兵庫県 高橋近江

見ておこう聞いておこうというタイプ

目に見えぬ心へ心従いていき

静岡市 多々良空

親切がある日利巧な悪に見え

貧しさへ靴がきちんとある出口

大阪市 岡本まさひろ

雪中に鳥が下りたようなししめ

大阪市 田中多幸

我が故郷トンネルぬけりや海が見え



前号10P17行目を「駅々をコスモスに埋めて小海線」と訂正。

★

コスモスが倒れたままで秋深む
高槻市 山田 スミ子
残飯を食わない犬に子がそだて
米子市 河瀬 茂人
鳥取市 中 沢 慎利子
運動会親子二代が駆けている
東京都 杉 山 徳 三
式写真前列だけがかわれて
大阪市 休 庭 一 休
もの干で秋晴ほめる妻哀れ
大阪市 木 村 久 子
孫の顔一番電車も苦にならぬ

セドリック
ローレル
ブルバード

乗用車専門販売店

尼崎日産自動車株式会社

代表取締役 若 本 真 彦

本社
尼崎市尾浜下ノ川434
TEL. 大阪(481) 5681(代)

神戸営業所
神戸市長田区二番町4丁目2-1
TEL. 神戸 56 代 6725

明石営業所
明石船上碓町82
TEL. 明石 91 5834

姫路営業所
姫路市市川橋1丁目13
TEL. 姫路 29 6145・7820

西宮営業所
西宮市下大市東町
TEL. 西宮 57 7681(代)

宝塚営業所
宝塚市川面南言田町
TEL. 宝塚 57 2626(代)

秀句鑑賞

—前月号から—

後藤梅志

なに考えていたのかわが家通り越し

(一三夫)

この句は、作ろうとして作った句ではないようだ。わが家を通り越し、ふと、われに返ってできた句のように思われる。つまり、思わず拾ういあげた句であろう。これが尊い。わが家は、内も外も知りつくし、これを間違えそうなはずはない。これを通り過ぎるとはおよそ不覚の至りだが、作者の頭の中は、いまいっばい何かつまって居り、なにも目に這入らなかつたように思われる。だれにもあることであって、そうそうはあるものではない。句は、拾うものであって、作るものではない。という古人の名言が、今さら思い当るのである。

御堂筋良い運ちゃんに乗り合せ

(形水)

そう取り立ててうま味のある句ではないが何んとかく快よい。老巧な句だ。

御堂筋に限った訳ではないが、タクシーはさあ欲しいという時にはつかまらぬし、つかまえても乗っても、稼ぎ時の運転手は突撃貪だ。どっちがお客か、分らないのである。

偶々、いい運転手に乗り合せた時は、地獄で、仏に会ったような気になる。

市バスなども、くるまは動いているが、停留所は待つ人がじりじりしている。乗りたい車が来ないのだ。自由になった平和になったというが、こんな犠牲はまっぴらだ。この句「良い運ちゃん」は「いい運ちゃん」と読んではしい。「運ちゃん」で生きている句だ。

草臥れがどつと仁王の大わらじ

(薫風)

憎いほどうまい句だ。

句には、阿(あ)吽(うん)の呼吸がありこれが句調をととのえるもののようだ。現在の作者は、いたって真面目で、着実にこの句風だが、どうやらカラを突き破ったかと思われ。

どこかへ、ハイキングにでも行ったか、長が道があるいて草臥れぬいて来たが、仁王さんのある石段へやれやれと辿りついた。フト見るはげちよろけの仁王さんと、大わらじが目についた途端に、どつと出てきた玉の汗が思わずすうーと引こんでゆく、その筋みちが生々と分かるではないか。

病妻の死(十月六日・南大阪病院)

帰りたい入院したい無理をききまだ温い壺抱かされて筆でかばう地に還える一壺の灰は軽からず

(旅風)
真実の句、というものは、したたかに胸を打つ。

旅風夫人の計は、雑誌到着の日に知った。彼れ(旅風)の愛妻家であることは、はやくから知っていたが、計を知った翌日訪ねたところ、意外に暗ければとしていた。晝は、家中かかって拭いたから安心して呉れと云う。先ず新しい位碑に礼拝を済ませた処、すぐあとから彼れも礼拝した。ボクより彼れの時間が永かった。

彼れの問はず語りの話をきけば、六六歳の死まで、病妻の面倒は三十年も続いたそう。有り余る暮しでもないのに、よく看護り最後の息を引取らせたまである。盃をふくみ咄々と語る彼れの顔は、童顔そのものであった。どこかで、まだ奥さんが生きているような気がしたのである。

いい場所にあるねと墓場値ぶみされ

(良子)

女性らしい観察をした、皮肉な句。

この頃墓地は公園化して、ゆったりした散策によい場所となった。ゆうれい(鬼)の出そうな提灯などは下げてないのだから。誰れしも好きな場所に、墳墓の地を求めたいだろうが、いい場所は殆んど他人に占められていて、めったにない。有っても高くて手が出ない。だからいい地域の墓地は羨望の対象となるもの。他人の墓地を羨ましいとみるあさましさ。近頃の風習おもしろい観察の句と思った。刈りこめば庭は冷たいかおである

(酔夢)

植木の手入れをするのは秋口で、サンパツをした庭木は、さっぱりと、邪魔な枝を払い落したわけだが、春から初夏にかけて水々しく緑をたたえた時が思い出されて、どうかすると無残な感じもする。白く目に映る切り口が痛々しいと思うことさえある。

人の感情はいろいろに働らくものだが、これを「冷たい顔」であるとみる。作者の感覚はするどい。

ああ清々したと見るのが人情なのだが。

早すぎる秋へ木の葉の正直な

(一葉)

昨年の秋は、近頃めずらしく速や足で訪ずれ、アツという間に、樹木の落葉する秋を迎えた訳だが、少しはや過ぎる感じもした。

樹木というものは敏感なもので、人々の思惑や、心配ごとに拘わりなく、自然の温度の変化に応じてさまざまな変化を見せる。とくに秋の陽はつるべ落しに、人々を驚ろかすものである。

しかしこの句は、単に秋口の速やさだけを云ったものではなく、女性らしいせん細な筆致で、身辺の遽だしさを訴えたもので、婉曲である。

秋は哲学　みの虫は養の中

(清生)

非常に、理智的である。

「秋は哲学」というのは、人間が人間らしい生活を営むには、物事を逆のぼって考えねばならぬ。ということをやったもので、作者

らしい思想だ。

一方みの虫のほうは、カラの中で時々かおを出したり、引つ込めたりして外敵に備えているといった観察だろう。どちらも何かに通じるものがあつて、一寸としたウィットをふくんでいる。見落ししやすい句だ。

つぎはぎの暮しも胸に赤い羽根

(千梢)

「つぎはぎの暮し」というのは、諸事足らぬ勝ちの家計という意味で、必ずしもツギハギの衣類を纏うているという意味でもないのだろう。こんな点が、この作者は成長した。

共同募金というのも、だいたい非難を浴びているが要はあつめ方で、主旨は悪くないし行為そのものが善行のひとつだ。

ただ、その日の暮しに困っている者までもという主旨ではない筈だ。しかし十円だけの奉仕だから、辛抱せねばなるまい。「胸に」としたところが、仲々落ちついた作句だ。

ジャンケンポン今日は私が床を敷く

(摩耶)

リズムカルで、明るい句。

新家庭をもった人らしいが、卒直ではほえまじい。いつまでも、ジャンケンでまけた方が床をしく。こうした稚氣を残しておきたい。この句をみて、これはどちらの方から云い出したものだろうかと思つたことである。茶目氣があつて、機智に富んだ若い奥さんは、いつまでも、家庭の平和を保つだろう。

チクタクチクタク逆立しても同じ音

(笑子)

時計が鳴る音を、チクタクチクタクというのは、英語だそう。秒針の音である。

元来眼は前へ働らき、耳は四方のものをとらえる。交通事故を予防するにも、耳が大切だ。この句は人間のえい智を教えている。

こんな哲学に近いことを始終考えている若い作家は、まれであらう。骨は折れるが、この作者のすくすくした生長と、精進を待ちたい。

「逆立ち」は、仮想したものであろう。

旅行・宴会・リクリエーションのことならどんなことでもご相談ください。

楽しい旅行のコンサルタント

イチビシトラベルサービス

本社 東京都大田区蒲田4-40-5

TEL 03 (733) 6951

守口出張所 守口市京阪本通2-18

三洋電機本社食堂内
TEL 06 (991) 1181 内線 588

鳥

川端東雲樓選

一筆啓上ほはじろの声きき直し
テレビから目出度く鳴いた尾長鳥
迷子鳥餌をついばむ程に馴れ
飛ぶ鳥を落とす威勢が貸し洪り
片脚で立つ鶴を見る松葉杖
惜しまれるトキ一列に羽ばたいて
渡り鳥故里ふたつ持っており
聖域に巣ごもる鶴の松林
渡り鳥穴道湖の冬を整える
倅せな鳥に人間してるだけ
せされいへ画になる杭がちうどあり
残飯で鳥を誘うて療養所
芸の無い鳥で平和を軒の下
どん底にいて小鳥も飼ってヨ
梅香も知らないまにホーホケキヨ
鳥籠は番い或日の未亡人
退院も近し楽しい鳥の声
小鳥さよう自由にされて餌に困り
かえらない小鳥を籠をあけて待ち
逃げた鳥餌さはどうしてるか知ら
初たびを鍛えいたわり親つばめ
鳥籠を隣に頼み小旅行
木枯が来るぞとあらずが来てせかし

白鳥が二年だけ来た田圃池
あつち悠悠こつちヒヤヒヤこつち
カナリヤの歌を聞きつゝシン踏む
せせらぎも潤れて小鳥の声ばかり
焼鳥屋一番鶏で火を落し
焼鳥へ師走の風を逃げてくる
渡り鳥また来年と言うて去に
こころよい目覚め小鳥も鳴いて
鳥去んできようも荒れてる裏の海
けさも来て鳴く鳥の名をまだしらず
人も来ぬ干潟は鳥の跡ばかり
ハンターに撃たにはるる渡り鳥
つばめの子顔中口にしてねだり
ハトポツポツを教へたカハトポツポツ
嫁ぐ日のせめてを籠の鳥放つ
捨てられる帯にごらく鳥が舞う
ハンターの獲物も売っている茶店

佳
目太たい日籠の小鳥へ黄味やろか
こんなきにおいよしんか青い鳥
許された試歩へ小鳥のエサをやり
ひよこヨチヨチ坊やもヨチヨチ春うらら
張り替えた障子へ小鳥朝を鳴く

鶴の舞う軸が新年連れて来る
果てしなく空果てしなく舞うトンビ
胸張って鳩くす玉の割れを待つ
七つの子連れて初日へ明け鴉

和久
まさひろ
磯山
藤波
春日
芳仙
十九平
曉明
秋女
惠二朗
輝親
素身郎
佳女
古方
里風
柳子
美代
和宏
古方
初甫
十九平
里風
柳子
七面山
美代

テーブル

小林孝正選

アベックで来てテーブルは放つと
熱弁にテーブルいささか迷惑し
昇進のパパへテーブル豪華版
テーブルにもたれて居眠る程疲れ
スピーチがながくテーブル欠伸
すうどん隅のテーブル選って掛け
テーブルに両脇ついて紫煙追
テーブルの皿がはみ出す嬉しい日
テーブルも部長課長の差がみえる
テーブルへすこし残しておく礼儀
テーブルの空くまで食事みつめ
満員へテーブルクロス編みうけ
テーブルの下からそつとつねらる
テーブルの下は普通の仲でなく
テーブルの下でこっそり握らせる
テーブルの下で歯がゆい靴を踏み
テーブルの配置も幹事気をつけ
合格の円卓母はたすきがけ
テーブルとテーブルいや視線合
円卓を囲み労資の持久戦
酒杯飛びテーブルスピーチも聞
テーブルをバラ一輪が見交わらせ
素うどんの客テーブルに忘れられ
テーブルを置いた一間もある老舗

葵太
水太
芳子
七面山
秋女
品充
双楽
好生
宵明
宵明
初甫
洛水
与根一
輝親
宵明
初甫
公輔
肖二
十九平
幽谷
頂留子
魚山

テーブルマナー右の通りに間違ふ
 テーブルが邪魔になるほどうまい
 テーブルは二人の距離をまだ保ち
 テーブルをはさんでもどか愛語
 テーブルを腰掛け代りにやぐざ伏え
 探訪の記者テーブルへ腰をかけ
 思い出があるテーブルの刀傷
 テーブルの端っこにいて異議が
 テーブルの今日は握手をさす役目
 可住

佳

卓上へ返事に困る電話くる
 テーブルを蹴って人生狂い出し
 テーブルへ明治の食事落着かず
 テーブルのシミを見つめても迷い
 テーブルを囲んで呉もなく越も
 藤波

人

テーブルをこつこつこつと待つ長
 どんたく

地

幸福を胸にテーブル掛けを編み
 梁水

天

テーブルクロス純白僕には過妻
 素身郎

軸

テーブルへ叩きつけたい金を借り
 保夫

柏手

服部十九平 選

柏手の音も儲けているらしく
 保夫

賽銭は十円柏手派手に打ち
 柏手の二人の願いごとは別
 柏手の横により添い小さく打つ
 良縁を頼む柏手念をいれ
 柏手に神官窓からのぞいて見
 柏手がしじまを破る杉木立
 青春を賭ける柏手澄んでいる
 柏手の慾へ神様横を向き
 柏手へ神主さんが目を覚まし
 神気よく澄んで柏手高く鳴り
 孫真似る柏手音もなく拝み
 野良の手と思えず柏手音が湧え
 気の引ける朝の柏手小さく打ち
 賽銭の割に柏手派手に鳴り
 柏手は同じ祈りの人と会い
 代表へ合わず柏手おくれがち
 柏手はそれぞれ違う願いごと
 柏手にお金の欲しい音がする
 仏壇へ柏手うったあわてよう
 柏手へ明治百年こめて打ち
 神妙に柏手おみくじ吉と出た
 柏手も女は女らしく鳴り
 神様と対話柏手念を押し
 総代で打つ柏手にみな揃い
 柏手も一歩さがって妻は打ち
 町長の柏手校長よりもよし
 柏手を打てば日本の音がする
 柏手へ菊の御紋がまぶしすぎ
 柏手のホンモノですと云うダイヤ
 柏手に女房のことも頼んで来
 柏手にも宮司柏手調になり
 芳子 進子 隆子 征山 無閑 まさひろ 好生 鶴声 三弘 英子 和久 吐痴男 緑明 祥月 勝久 佳女 無聖 正朗 代仕男 葵水 曉風 輝親 白亭 初甫 洛醇 富子

賽銭の音たしかめて手を鳴らす
 朝の日へ先ず柏手を打つ余生
 柏手も打たずシャッター切るは
 必勝を期す柏手は派手に打ち
 総代の柏手あがった音で鳴り
 氏神へ柏手一家離村する
 柏手は自分に聞かす音で鳴り
 柏手はご立派アルミのお賽銭
 柏手に私の心も清められ
 家内一同並ぶ柏手音が割れ
 全快の柏手借りを返すごと
 組んだ腕とお義理の手を叩き
 柏手も忙しそうに拝んどき
 柏手の音も揃ってきた夫婦
 拝観料とるから柏手打たずに
 柏手に順番のある初詣で
 花嫁の方が柏手少しずれ
 柏手も夫唱婦随の音で明け
 柏手へ肩のカメラがすべり落ち
 団参の柏手ばらばらと鳴り
 柏手のそれからずっと子を抱かせ
 柏手を義手が嬰手の音で打ち
 幽谷 惠二朗 魚山
 柳 箸
 一冊 六五円 送料 三五円

川 柳塔 柳 箸

投句にご利用ください

初歩教室

題「世間」

菊沢小松園

今月の題は範圍の広い、或る意味では無限だ、それだけに焦点を把握するのに苦労されたのではないかとも思う。併しこう言った課題は、応々苦勞甲斐のある句が生れるものである。題意に追い馳けられるより、いつも句の余裕と準備があつて、どんな題でも追いつけ追い詰めるようになりたいものである。

物価高とさわく世間へ塀高く
飄々と暮して世間へおくれてず
二人きりの結婚世間とたたかう気
世間にはまあることとなだめられ

女房は世間を楯に取って攻め
誓二
葵水

①世間の騒ぎを尻目にわれ関せずと超然たる態度、齒痒いばかりに落付き払った高塀の中の別世界、座五がいい、筋金の入った一句は光る。②この型の人に本当の鍛い上げられた、外柔内剛を見る、所謂食らえぬ人も上五の句語に美しく画き上げられて奇麗な句になった。③若さの勝利である、下五で二人の意気込も判りこの結婚の背景も窺える考えた上

の一句と言うことも判る。④中七に世智に長けた人を想像出来て面白い、対する人の年齢差をも充分察しられる。⑤これが女の常套手段であり、世間を味方に出すことは最も手近かな鉄壁である、仲のよい家庭争議の一コマである。

勇退と世間素直に見てくれず
世間にも通る資格はまだだせず
落ちぶれてからは世間をせまく住み

世間体夫婦喧嘩も地味になり
火の車知らぬ世間の風当り
利美

①妙に勘ぐるのが世間の常、素直に取つて呉れぬところが世上の習い、事実勇退組にも色々々の型がある。②資格が固まらぬところに明日への希望も湧くのである、下五に自信を見せて句の雰囲気は明るい。③暗転、薄暗い舞台だ世間の目を恐れる姿は判つてもこれだけでは如何にも暗いそれを跳ね返す一片の明るさを句に見せてはしかった。④賢い夫婦喧嘩で世間へ判らぬ程度にジワジワ持久戦で遣られては男の方が参る。⑤知らぬが仏の世間の風もこちらが火の車なのできつう堪えて得てしてこうした時に事が多い皮肉な世間ではある。

子を庇うときは世間へ目をつむる
意地張って渡る世間を狭う住み
愚直さと才覚隣同土に住み
世間でも囁してると低い声
世間体の方へみんが味方する
①子をおもう親ごころは時に理非を超越して

黄銅六角ボルトナット
及び特殊換物全般

合資
会社
西出螺子製作所

大阪市天王寺区空堀町八番地
TEL 06 三四五二一四
夜間 06 四四〇八

世間を敵としても、女はよわしされど母は強しである。②あちら立てればこちらが立たぬ世間の義理は辛いままよと意地を貫らぬき通せばそこは冷たい世間の慣い浮世の風も狭く佗びしい。③極端な異色が隣同土に住んで利用され騙され、併し当人氣が付かねば至つて平穩傍目が氣をもんでも仲よく平和に交際、智恵を増すものは怒りを増すか。④世智に長けに説得は低い声が反つて肺腑を突くかくて対世間に引き戻されて迷える小羊もやうと正気、この句氣取らずさりと詠んでいい句になった。⑤世間体を氣にする人は眼がきれい誠に常識の座で孤塁に依つても初まらぬ水は低きに就き大衆は平凡につく。

世間体あつて一口義理を立て
露路裏に住んで世間の情を知り
世間など若い夫婦の氣にしてず
偶然に世間はせまいものと知り

軒太楼
肖二
綾女
富子

世間の目気にする女へ遠く住み

茂美

①例の奉願儀式の寄付のことであろう世間体だけで洩々一口だけの義理は済ませた下五に句の重点を置いて庶民の哀感に触れている。
②一応この欄の人としては句になって居るが余りにも誰でもそう思いそう感する境地で損であろう。
③これも同様如何にも古い、可もなく不可もない。
④偶然のいたずらで世間の狭さを感じたよくあることで、それゆえ故人生も面白い。
⑤生硬さが目立つ、消化不良の感じ、もう少し推敲されるとよい句になるように思う。

汗のない生活へ世間の目が光り
世間には鬼から出る荷に人だかり
何時までも世間子供と見てくれず
甘くない世間と知った子の便り
世間体旧家を雁字がらめにし

美代
吐痴男
芳子
同
静子

雅号ぶっちゃけばなし(46)

ならこ



・久米奈良子・

二十八年度でした。大河原モトエ先生のおすすめ、呼び名を奈良子と改めました。当時住んでいた隣の奈良県樺本町にある通称「ならの宮さん」にあやかってのことそれから少しづつ病状も好転しました。もともと短歌や俳句に親しんでいたのですが、保健同人誌の川柳欄に投句を始めたのもその頃だと記憶しています。その後川柳時代に姓名学上は、由良子の方がよいとききましたが、これ以上ユラユラしてはいけないうので奈良子で通しています。一もとの紫草匂うゆかりの地に一度は住みたいと古都への尽きない夢も叶わず過ぎました。ともあれ奈良の好きな私にふさわしい名だと今は亡き名付親に感謝しております。どうぞよろしく。職業 書家(四十二歳)

①お節介な世間の目はあらぬ噂も立て兼ねない羨望と嫉妬の目である無論の場合女である。句主の目もよく世間を見て居る目である。
②一寸迷った、世間を見て居る目は鬼と言われている。人の家から嫁入の荷が出る近所の人が寄って噂していると言っているのである、句意は判るがやや句の運びに引掛るものがある、鬼から出るに難があるようである推敲された。
③すらりと詠まれたのがよい、殊に上五の出だしがよい恋知る頃の子を持った親の心境がよく出ている、嬉しいうえ、不安なような複雑な感情である。
④子の眼に映った世間は甘いものではなかった、その心が堅実な社会人となる道に連がる。
⑤旧家に生れた不幸である何時も世間の眼を感じての日常に自分の生活はない、伝統に生きる田舎の旧家には未だこんな家があるのかも知れない。

それとなく世間話にして戻り

正朗

身にしない若さ世評を受け流し

同

いきり立つ若さ世間を未だ知らず

白汀

そっとして呉れぬ世間を酒に遁げ

同

親はだまでも世間はだまされず

頂留子

①苦労人の世慣れた態度がよく句に生かされた是れでこそ平穩の裡に事が運ばれる、きめの細かきよい句だ。
②世間の評判を苦にしない若さこれこそ鬼に金棒、下五の軽さもない。
③上五で一句が生きた、自戒の句もこんなにすらりと詠めれば申し分ない。
④これも自重の句ながら第三者に依って冷徹に詠まれたものである、まだ苦勞が足らんあとと言う処か。
⑤弱い人間の一面を確かに突いている女性の句としては力強い、お節介な世間への抗議上五に哀感を覚える複雑な心理過程を巧みに把握している。
⑥親はわが子への愛情で騙されてもやがて世間はそんなに甘い処ではない、一途に子を案ずる親の姿が痛ましい。
女にも世間があつて今日逢えず
選者吟

世間奇なり己れの奇には気がつかず
同

題「一年頃」

四十四年一月二十日締切三月号発表

宛先

大阪市阿倍野区王子町四丁目二番二十二号
郵便番号五四五 菊沢 小松園

題「誘」 二月二十日締切・四月号発表
宛先 岡山県倉敷市下津井三五二

新担当者 本田 恵二郎

第二百十回(四十二年度最終回)

大 萬 川 柳

「 塩 」

入選発表

選者 清水白柳
 投句総数 六百四十三句
 入選 四十二句

大阪 双葉
 お隣で塩まで借りる仲のよさ

大阪 あいさ

気の毒な塩なめくじに乗せられて

島根 芳子

塩まけば気のすむ明治に逆わず

島根 正朗

漬物は母に委せた塩加減

岸和田 きさ子

盛り塩も溶けて色街昼になり

西宮 百酒

塩加減あなたに合わず舌を借り

堺 青香

常連の舌が許さぬ塩加減

岡山 十九平

山の子が海水なめてみる科学

篠山 可住

母の指グラムで云われ塩加減

高槻 静馬

塩断ちも効かず予備校へまた戻り

大阪 本蔭棒

血圧の不安一さじ減らす塩
 大阪 弓彦
 そこら中開けて塩で飲むときめ
 大洲 曉明
 あじ塩で空揚げうまい法善寺
 堺 天笑
 塩噛んだままで歯医者へ飛び込め
 大阪 痴亭
 壺に塩満たして妻は豊かなり
 東大阪 生長
 嫌な客やと帰して塩を撒き
 熊本 芳仙
 塩まいてくれと玄関から怒鳴り
 大阪 柳志
 大阪の義理を立てとく塩昆布
 大阪 文秋
 粹人に盛り不粋には撒いた塩
 大阪 阿茶
 塩だけで燗も自分でつけて飲み
 笠岡 要次
 赤飯を近所へ配る塩を煎る

倉敷 恵二朗
 塩加減或る日実家の味にする
 大阪 滋雀

塩加減間違えお粥ほめられる
 塩まいてやれとひやかし見送られ
 堺 草春

塩まいた客が今夜も来てねばり
 ぜんざいへ母に習った塩が過ぎ
 富田 花梢

姑のキャリア耳かきほどの塩
 血圧をいたわるような塩加減
 宝塚 ゆきを

敵に塩送れんものか話題変え
 塩まいておけとこっちへまで当り
 宝塚 無聖

もう覚悟出来た喪服へ塩を受け
 盛り塩は女将の指の型で盛り
 古漬けは母が遺した塩加減
 佳句

塩なめて相続税を増やしてる
 米子 千代

共稼ぎつい塩が切れ味噌が切れ
 鳥取 日満

塩水でうがい半分ひいた風邪
 大阪 美房

清め塩ふって他人の声となり
 大阪 章雅

快調が金星狙う塩をなめ
 人ノ句

藤井寺 吸江
 水も打ち盛り塩もして今日もひま
 地ノ句

塩撒いておけと自分をなぐさめる
 天ノ句

入院の妻塩つばも満たしとき
 選者吟

ゆで卵清め塩ほどつけて置く

大萬川柳四十二年度
 ベストテン決定

- 一 八木 千代 二八、五 米子
- 二 本多 柳志 二七、五 大阪
- 三 野田素身郎 二六、五 倉敷
- 四 川村 好郎 二五、五 高石
- 五 金井 文秋 二四、〇 大阪
- 六 正本 水客 二三、五 大阪
- 七 笠原 吸江 二二、五 藤井寺
- 八 中村ゆきを 二一、〇 宝塚
- 九 傍島 静馬 二〇、五 高槻
- 十 吉岡 美房 二〇、五 大阪
- 十一 城 一舟 一七、五 大阪
- 十二 服部十九平 一七、〇 岡山
- 十三 礪 弓彦 一七、〇 大阪
- 十四 河村 日満 一六、五 鳥取
- 十五 木山 要次 一六、五 岡
- 十六 福島 鉄児 一六、〇 門真
- 十七 中溪 慶彦 一五、五 尼崎
- 十八 内藤きさ子 一五、〇 岸和田

十九 和 海 草 春 一四、五 堺

二〇 浜田久米雄 一三、〇 岡 山

二一 中 川 滋 雀 一三、〇 大 阪

二二 里 小 路 一三、五 大 阪

二三 水 粉 千 翁 一三、〇 倉 敷

二四 松 下 梁 水 一三、〇 倉 敷

二五 山 川 阿 茶 一三、五 大 阪

二六 本 多 清 人 一三、五 大 阪

二七 堀 江 芳 子 一三、〇 島 根

二八 今 西 章 雅 一〇、五 大 阪

二九 古 川 静 波 一〇、五 大 阪

三〇 堀 江 正 朗 一〇、〇 島 根

年間投句者総数 百六十八名

以下略

ラストスピード効かし堂々第一位

梅里賞

〇特別表彰

川柳塔社常任理事会

四十三年度最後の常任理事会が十二月四日本社で開かれた。さすがに師走とあって、はじめてのことだが、五氏出席という最低記録である。

新年句会は、これからはじめてのことだが、日曜日をはずすことになった。会場の関係でこちらの希望する日がとれなかったのである。

四十四年度からは「以和貴莊

を獲得。 八木 千代氏

準梅里賞 終始敢闘、惜しくも第二位。

本多 柳志氏

年間常に第一位を占め最終回に残念にも第三位。

野田素身郎氏

昭和四十四年度第二回

「重役」 五句投内

★締切一月二十日

★大萬川柳会の会則は前号発表。

宛先

大阪府高石市高師浜三丁目五ノ六

郵便番号 五九二

川村 好郎

電話堺(〇七二)六一六一六二

電話堺(〇七二)六一六一六二

電話堺(〇七二)六一六一六二

電話堺(〇七二)六一六一六二

電話堺(〇七二)六一六一六二

電話堺(〇七二)六一六一六二

電話堺(〇七二)六一六一六二

電話堺(〇七二)六一六一六二

電話堺(〇七二)六一六一六二

電話堺(〇七二)六一六一六二

電話堺(〇七二)六一六一六二

電話堺(〇七二)六一六一六二

電話堺(〇七二)六一六一六二

電話堺(〇七二)六一六一六二

電話堺(〇七二)六一六一六二

電話堺(〇七二)六一六一六二

電話堺(〇七二)六一六一六二

電話堺(〇七二)六一六一六二

第16回 大萬川柳大会

日 時 昭和44年 2月23日 (日)
12時半

会 場 割烹 大萬 (故松江梅里宅)
大阪市阿倍野区松崎町 3丁目

会 費 百五十円 (大会句集費を含む)

司 会 西尾 榮

開会の辞 若本多久志

柳 話 中島生々庵

挨拶 川村 好郎

昭和四十三年度ベストテン及び梅里賞、準梅里賞の表彰

★新年度第二回「重役」入選発表

兼題 清水 白柳

「代がわり」

「意 志」

「素 顔」

「好奇心」

「注 文」

「水」

「吸 物」

席題 三題 (当日発表)

選者 中村ゆきを、傍島静馬、吉岡美房

★兼、席題三句以内の事

閉会の辞 菊沢小松園

ベストテン招待懇親宴

註、投句のみの方は百円封入(句集代を含む)

(各題別々に柳箋または便箋に記載の上

二月二十日までに好郎宛送って下さい。

(選者の方で当日出席不可能の方は早目

にご通知下さい)

主 催 大萬川柳会

後 援 川柳塔社

後 援 川柳塔社

後 援 川柳塔社

後 援 川柳塔社

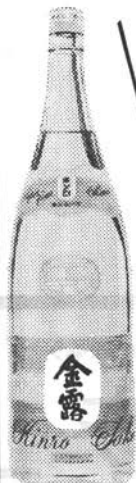
後 援 川柳塔社

西尾 西尾 西尾 新岡 二越 永松 永藤 長野 柳楽 中島 中島 永尾 中川 中川 中川 中村 中村 中筋 仲藤 内藤 内藤 戸田 友淵 都倉 土岐 遠山
青一 義一 いわを 回天子 俊爾 道雄 弥平 文庫 鶴丸 生々庵 小石 英断 滋雀 晃男 淳子 ゆきを 九呂平 三幸 どんたく 幸子 幸子 古方 貴山 求女 トク子 可住

林野 林野 林野 林野 早川 浜畑 浜野 浜田 羽原 服部 長谷川 橋本 野呂 野村 野村 野村 野田 野坂 奴田 西出 西田 西垣 西森 西辻 西川 西岡
甞昌 夢葵 清生 胡蝶 奇童 久米雄 光治 静歩 十九平 三司 緑雨 鷗汀 味平 太茂津 素身郎 紅雨 柳宏子 錦風 花村 竹青 誓二 洛醉

藤村 藤本 不二田 藤岡 藤井 福田 福田 福田 福田 福井 福井 弘津 平田 平田 平尾 平井 菱田 久家 樋口 馬場 馬場 長谷川 長谷川 羽佐間 原野
礎山 三夫 花梢 明朗 清夢 丁路 多可志 正則 鉄児 多蘭子 野迷路 柳慶 実男 太希志 井平 満秋 代仕男 舟遊 魚山 夢生 義英 紫光 柳葉 独仙 千里

水粉 満田 満井 満生 間島 丸川 松川 松本 松本 松塚 松下 松川 松岡 榎本 正本 前山 本多 本多 本多 本多 本多 細呂木 古川 古川 古川 舟木 藤原
千翁 銀風 醉夢 山子 初甫 半月 忠三 吉太郎 美知代 梁水 たつみ 杜的 瀧浪 水客 北海 柳志 惠二朗 清人 金三 魯木 魔花麗 静波 鶴声 秋月



金露

灘を支える
清酒の味

キンロ

金露酒造株式会社

森川 室谷 村山 村田 村上 村上 三輪 宮地 宮口 宮谷 宮尾 光好
すみれ 鉄舟 光輪 瓢太 旭童 峰円 双生 笛笑 珠莊 あいき 陽子

吉田 吉岡 横山 山本 山本 山本 山内 保西 森本 森田 森田 森下
圭井 美房 一立 素郎 阿茶 静水 岳詩 摩天 法泉 布堂 茗人 愛論

渡辺 渡辺 渡辺 若柳 若本 若本 若海 和山 山田 山田 若林 和田 吉原 吉田
乱坊 独歩 曉童 潮花 多志 多志 多志 草春 草春 千太郎 一乃字 紅月 水車

☆ 柳 界 展 望 ☆



左から橋高薫風・藤村涼子・中島生々庵諸氏
番傘川柳まつり・太閤園庭園で岡橋宜介氏撮影

(橋 高 薫 風 担 当)

▼麻生霞乃先生は近來非常にお元気で、元不朽洞の一步氏居や河内の西村梨里さんのところをしきりに訪問されている由。霞乃先生をはじめ川柳塔岡人、読者諸氏に幸せ多き年であります。今年もよろしく、一層ひんぱんなお便りを待っております。

▼中島小石さん(大阪同人)は東上された機会に川上三太郎氏を見舞われたが退院して調布の愛嬢の嫁ぎ先きへ保養に行ってお会いできなかつた由。

▼浜光治氏(和歌山同人)は厚生省関係の功績により藍綬褒章をうけ、十一月二十一日陛下に拝謁された。▼第十九回新年交歓三十六題川柳大会は一月十九日開催される。兼題は、飾る・鳥・鐘・塩・腰・誘う・読む・行列・陸橋・世話・意地・予告・偶然・毛糸・台所・反応・来客・神話・鼻声・裏表・白状・開ろり・高笑い・ほろ酔・宇宙船・日の丸・夜明け・揺れる・紙

一重・がっかり・いたずら・ヘルメット。投句は、広島県安芸郡坂町小屋浦広島川柳会編集室宛。▼函館市文化祭協賛市民川柳大会は十一月十日(日)午後一時から大手町鶴友会館で開催。▼昭和四十三年度冬眠子賞の作品が募集されている。「こなゆき」誌上に掲載されたことが応募資格になっている、三月号に発表になる予定。

▼後藤閑人著句集「あしあと」出版記念祝賀会が十二月一日(日)正午から仙台駅前日の出会館八階ホールで開催された。▼第十回北日本川柳大会は十月二十日、更上閣で開催。主催ははちのへ川柳社。▼吉井川柳会、伊東川柳会、夢迎会合同川柳大会は十一月十六日磯部温泉で開催。上州妙義山の峻嶒を前に詩と民話の風土を満喫された。▼豊岡川柳天守閣三周年記念大会(豊岡市)は十一月十七日(日)瀬戸公民館で開催。本社同人の羽原静歩氏が出席された。▼相元紋太先生から、「ぴり」とも動けぬ小生、じつと居よ、何も思わず句だけ

考えよと、じつと押えられて寐てばかり。結構すぎて退屈で天井を見ている。▼堀口塊人氏(西宮市)から「すゝむさん追悼句会お世話さんです。ご苦勞に存じます。話のこと承知致しました。「古本物語」の題でよろしくお願いいたします。すゝむさん郵便番号無いとこ」

▼大森風来子氏(岡山市)一家は十一月十六日令嬢の渡米を見送りに来阪、同夜は海士天樹氏、藤村涼子さんと薫風居で飲談一泊、翌日通天閣、ジャンジャン横丁を見物後、折から来阪中の高鷲亜鈍氏と同じ列車で帰岡された。▼清水白柳氏(大阪府同人)と富田林の本庄金三・宮地双葉・加藤貞山の諸氏は森田若人句碑建立句会に出席十一月の連休を鳥取の旅で楽しめた。殊に貞山氏は故郷のこと故なつかしき一しおであった。

▼長野文庫氏(今治同人)は九月九日の西日本川柳大会当日の写真の札状に、白菊の絵を添え、「野菊一輪持って御礼にまかり出る」と寄信される。奥深く感銘を受けた。



マイペースで飲もう

アサヒ
スタイニー

は十一月二十四日のNHK川柳選評「出来心」、中島生々庵選第一席に入選された。「出来心煙突男腹が減り」

▼川岡霊眼子氏（諫早市同

新同人紹介

高 橋 鬼 焼

静水・甕光推薦

野 坂 つき子

摩天郎・笑痴推薦

大 塚 勇

明朗・白柳推薦

福 間 清 夢

明朗・白柳推薦

古 川 静 波

好郎・白柳推薦

古 川 鶴 声

白柳・生々庵推薦

岡 村 久 志 良

白柳・生々庵推薦

アワセノホシニカコマレモ
ユルモノの句は来会者に
感銘を与えた。

▼東野大八氏（美濃加茂市）
は十一月二日長崎佐賀への
旅に出られる。社用兼私用
で若いときから放浪性がある
ので二カ月ぐらいますと
すぐ旅の虫が顔を出しますと。

▼金井文秋氏（大阪市同人）
三女美津代さんは、かつて
小・中学の同級生であつた
飛田芳宏氏と結婚、十一月
二十四日に華燭の典を挙げ
られた。

▼垂井葵水氏（和歌山市同人）
は十二月六日日本社句会
へ出席、誌上で馴染みの柳
人と交歓一夕を楽しまれた

▼弘津柳慶氏（出雲同人）
は十一月一日前任所長の見
舞いに大阪附属病院へ来阪
六日に今度は葬儀参列に神
戸へ来られたが、本社来訪
の時間なく引きかえされ
た。次回には是非お立寄り
下さい。

▼羽原静歩氏（守口市同人）
は城崎へ。十一月十七日。
「関のように潮騒攻めて来
る」

▼水粉千翁氏（倉敷市同人）
は定年退職後社団法人山陽
技術振興会に勤務「ペンだ
こと話す昨日の涯しくなく」

▼時実新子さん（姫路市）
から、「川柳塔十一月号の
河相すゝむ氏逝くのページ
にまたしても胸のふさがる
思いを味わいました。あの
お方にはご自身お気づきに
ならぬ徳というものがあり
ました。」

▼山田季賛氏（高槻同人）
は救急法講習会で悲劇の有
馬温泉へ行かれ、また新三
十三カ所巡りをされている

▼加藤貞山氏（大阪同人）
は文化財を尋ねて四国路へ
行き、牧野文庫で川柳人と
しての生物学の大家、牧野
富太郎九十五歳とある句書
を見られた。土佐よりの木
の葉はいと天狗云い。

▼市川鱗魚氏（岐阜市）は
飯坂温泉から人情美と地酒
のうまさがり旅だけに身
にしみたと。

▼ひらけゆく電気誌十二月
号の「川柳談義」座談会で
生々庵、阿茶、一三夫氏が
六ページにわたって歳末風
景などを語られた。

疲労
肩こり
神経痛
食欲不振

アリナミンA



タケダ

六日 午後六時

43年度のさよなら句会が、奇しくもこの会場ともサヨナラ会場になる。新春からアベノタミナル付近の「以和貴荘」で本社句会が開かれることになった。

清水白柳氏の柳話は「川柳が上手になる」というダイナミックな題がつけられた。自信をもって柳話のナミキに会場は緊張。大好評である。月間賞は北国日出雄氏が獲得して、花梢さんと一三夫氏が共に二回で、年間大位の数で永久保持がきまる。(河井庸佑整理)

城
一舟選

おれに似て来た言ひ訳を聞いてやる
言いわけが過ぎた疑う目に変わり
言いわけへ女の妬心からみつゝき
言いわけに　来た女房と口合わず
言いほどの言いわけ口べた語り出し
言いわけをしてもわからぬ親もち
遅刻した言いわけタイを縮め直し
言い分けを七分三分の顔で聞き
忠告はあした言いわけ聞いてやる
恐妻の前で言ひ訳聞かな忘れ
言いわけをするから噂広げられ
言いわけをするから妻がよい妬き
言いわけが過ぎつかまれた言葉じり

葵彦 弓彦 弓彦 千弓 千弓 滋媛 葛城 千梢 文秋 二

言いわけの嘘を黙って聞いてやり
言いわけを待つてゐるに茶を入れる
マジヤンを悪友が来て、社用にし
亡き人を汚がす言いわけ引つ込める
言いわけの不得手の部下に氣を使い
言いわけが血液型で崩れかけ
言いわけの要らない程に酔うて来る
アリバイがあるのに言訳まだつけ
言い訳へ背が冷たい回り椅子
玄関へ出ても言いわけくり返し
言い分もあるうちに野良犬追われたり
言いわけをししい自分か嫌になり
言いわけを考えている千鳥足
言いわけを聞くのも忙しい十二月
それでもそれでもと言いわけ涙出し
外泊へもう言いわけの種類が尽き
口下手でよい言いわけのうちそがなし
まごころがわかり言い訳手でおさえ
言い訳を考えついてベルを押して
言いわけを言わざず社長かたたき

席題「妻」

神谷凡九郎選

もう十年若かつたらと妻も言う
妻と言う字へハイスミスう妥協
妻にはひびかない長恨歌のリズム
妻となる日のぬくもりへ日が短か
名所妻の個性へ光るなべ
妻妻と言わねばならぬあわてよう
老妻に言い負かされて笑う齡
小春日を寄り添う肩は妻ならず
いいわけもぬけぬけ妻のきき上手
人妻の距離は崩さめおつき合ひ
倅のひとづかに妻のバス旅行
新妻へ未来の夢が美しい
妻だけに判るサインの目が動き

水客露芳英已代日出雄六童子一三夫多久志村菊水一刃花梢雪霰六童子天笑

柳宏子花梢あいさ形水双葉生々庵吸江郎滋雀白柳美已代文形春秋千梢好村雲柳小松園一舟

神谷凡九郎選

妻の手のヒビ割れ見つけた。二月
中性でないかと思ふ妻の声
幼ながらどこかに妻の少女趣味
さりげなく老後のことに触れる妻
妻の言う大変にも馴れ日々平和
妻の座を案じて呉れる週刊誌
とうみても妻は空気にさも似たり
妻という名の女しばられる
悪妻というレッテルがはがれない
妻を語る随筆のろけわるびれず
わすれな妻らしくないしがゆきよ
人生の終点妻にしがみつきの
妻にまで信じられてる不運
まだこんな色気があった旅の妻
ポケットのマッチを妻は尋ねない
二号にも妻にもされて湯につかり
三日程妻に寝込まぬ濡れマッチ
しまりやの妻が離さぬ割烹着
女房が女房と言う手もありはあり
貞淑な妻として見る水中花
妻の声やさしく聞える電話口
遠き鼓動となつても私は妻です
ほろりがく妻と握手をさせられる
回り道した人生へ妻が居る
女房でも夫人でもなしただの妻

席題「おとし穴」岡橋宣介選

落し穴のように大阪穴だらけ
都会には落し穴ありマンホール
落ち込んだ熊をうさがのぞき込み
銀行もかつたれていた落し穴
裏金を掘んだとたんおとし穴
おとし穴筋書どおりで落ちてくれ
甘口に乘ってやつぱり落し穴
示談書におとし穴ある人生

凡吉 一三 天笑 あいき 萬城 白呂 文柳 好郎 摩太郎 吸江 舟遊 村雲 綾女 生々 水庵 静馬 小松 金彦 弓彦 静馬 水客 静步 与呂志 美代客 水客 滋雀 凡九郎

岡橋 宣介選

[illegible]

嫁の荷へスケート靴まで入れておき
白鳥のため息となる スケーター
歳意識されて スケート場を出る
スケーターの流れの外に 居る自分
スケートの 渦よいことに 肩を組み
スケートの 女 幸せ 追う姿
水すましさがうまい スケーター
羽根の手を振る スケートゴーリン
スケートの 燕返しに 似る 妙技
魔女として 苦手の スケートこきとき
スケート靴カメラちゃん 立つはず
スケートの ボーズも 恋になつて
跳び上り フギア 振り糸戻るよに
止まらない スケート 大きな 声を出し
ぎこちない スケート 曲は ワルツで
わかさぎの穴 スケートの 声遠くなる
ライバルの 見ま スケート 派手になり
スケート靴は けげん 丈も 気にならず
スケートの ように 人生 走れたら
スケートで 一周した 顔母に見せ
スケート靴女王の 地位は うごかない
肩組んだ まま スケートは こころで
水上 バレー 同心円が ちさくなる
スケート場 わたしと 違う 処女時代
スケートの 予猶は 枯葉を 啜え

兼題「外来語」

正本

水客選

外来語 いっぱい 辞引ひいて 見る
ご先祖のアレが残したカステラ
国語 辞典どの ページにも 外来語
或る日 ふと 老妻英語を 口に出し
外来語 相手次第で 馬鹿にされ
外来語 あとで 字引に 用があり
NHK が 外来語だと思ひ 込み
外来語 つぎつぎ 明治 遠くなり

虎城 章雅 鶴水 野路 公輔
吸江 静歩 滋雀 小松園 村雲 村松園 小松園 静馬 小松園 葵水 万客 摩天郎 多志 久志 舟遊 生々 水客 風舟

兼題「役人」

阿万 万の選

日本の 文化 外来語 から 作り
外来語が 混じると 名文らしくなり
外来語使い 垢抜けしたつもり
折にふれ 器用に使つた 外来語
法に 聞く 服飾の 外来語
有弘と トニーが 日本語 かきみだし
外来語 日本 向に 加工され
キッチンの 言葉 大工の 気に入らず
外来語で 言えと 日本語で 売られ
日本語で 言えと 日本語で 叱り
さよか 外来語で つかと 恐れ入り
外来語 使つて 日本 平和 になり
外来語も 社長 ちがつた 儘 通り
何もかも 外語で 飛行場 ロビー
片仮名になり 外来語 生きつづけ
言われたら そうかと思ふ 外来語
外国の人に 通ぜぬ 外来語
バチンコも 英語のうちと思ひ こみ
コンピュターへ 外来語の 記憶
語学 もう 役に 立たない 外来語
輸入 超過 と思える ほどに 日本語

法規では こうだと 役人 とりあわず
役人とも なければ ムードに 縁 遠く
役人の 威厳の 裏の 人情味
役人まで 役人タイプ 怒鳴りたし
役人の 域をはみ出す 知恵に 泣き
役人の 頭この 程度 かもと思ひ
酌ぎながら お役所ですと 言うばし
役人の 妻で 付き合ひ せねばられ
諦めた 頃に 役人 判を 押し
予算まだ 余り 役人 出 張
代理では あかんと 役人 そつげなし
色褪せた 役人 に出る 国訛り

礎山 百祥 日公 虎吸 鶴水 小松園 好郎 生々 庵

謹賀新年

本番で あがり

手品の種がばれ

(瓢太)

大阪市南区大宝寺中之町一

誓得寺内

関西奇術教室

校長 村田 瓢太

役人の 威厳 明治は 遠くなり
役人の 古手 顧問に 抱えて い
出世 コース 歩むも 毛並のお役人
役人の ベン先 教える 次の 窓
一線を 引いて 役人の 腹黒ろさ
役人となつて 休まず 働かず
執達吏の 情は 見えぬとこへ 貼り
役人 に向えば 肩の こる 話
退官と 知つて マダムの よそよそし
言い 抜けに ちよつぱり 私とく 小役人
役人 昼 只今 食事中の 窓
役人は 自腹で 飲んで 疑われ
議員さんの 顔で 役人 改まり
役人は おかたからと 嫁くつもり
役人の 家 ドライな 息子に 育ち
お役人 漫画 の 中で 汗を かけ
役人が 階級 の ある ドアを 押し
観光課 役人 ばなれの 肌ざわり
役人に 言われた 所に 判を 押し
下っぱは 下っぱは 判の 持ち

天笑 形水 柳宏子 凡歩 静城 葛江 吸馬 静雲 村吉 摩天郎 葵水 花梢 花梢 金遊 鬼吉 形水

受持ちが違つと役人煙りの輪
役人としての握手と知っている
役人の目にこの遠の離婚沙汰
むず痒い妥協を役人ほめかし
夜回りか役人から叱りつけ
ミス 審査村の役人かり出され
天下りしてから役人中が出来
愛想がよくて役人頼りなし
かたくなに縄張りがありお役人
役人はいいなサッサと時間きり
老眼鏡にかえて役人にある乗り気
恐れ入る顔へ役人念を押し
たばこ屋のまだ役人がぬけぬヘ
古本同様停年が来てたお役人

多 久 志
水 客
日 出 雄
生 々 魔
大 吉 魔
美 代 吉
凡 弓 彦
滋 山 彦
眞 水 客
一 水 客
村 一 客
万 的 客

兼題「寝返り」

菊沢小松園選

信用をしてたに寝返りしてしま
寝返る気何を知らんふり
寝返りに唯惜しかったタイミング
寝返りがあつたと次点卓叩く
それからの夢に会いたく寝返りし
寝返りのうちの票まで加えとり
寝返りも計算に入れ子を眠かせ
人間は哀し寝返りしつづける
寝返りを怒れぬ程に惚れている
艶消しな寝返り妻の疲れのこと
寝返りを打つてもつづ金のこと
寝返りをうてば母の手肩にふれ
過信した友にどたん場裏切られ
寝返りが出来て退院近うなり
寝返りをうつ腹すでに読まれとり
寝返りも打つて一問へ泊りに来
寝返りから心配のないいびき
寝返りの票も予算に入れておき
土壇場で腹心にさえ寝返られ

祥 月
鶴 声
野 迷 路
ど ん だ く
虎 城
日 満
あ い き
旅 風
礎 山
多 久 志
百 水
凡 吉
村 雲
い さ む
庸 佐
柳 宏 子
葵 水
生 々 魔
瓢 太

維魚寝して寝返りするのも気を使い
寝返りの票も初手から読んで居り
今までの恩を忘れて引き抜かれ
寝返りを打つ時だけは斬止め
寝返りのたびに子供に蒲団かけ
寝返りも可愛い嫁の世話になり
寝返りをするよなやつは腕が立ち
腹心を寝返る程に社も落目
寝返りを詫びたハガキを揉みつぶ
寝返りの背中に母の手がどとき
寝返りもあって政治がたもたれる
寝返りへ冷たい世間の風当り
寝返りて寝返りの続き聞きもらし
寝返りの妻を遠いものに見る
寝返りはママの匂いを追っていき
寝返りの出来た子供を取りかこみ

綾 太 女
飄 秋 太
肖 二 秋
文 舟 二
静 馬 二
天 秋 馬
一 笑 客
水 遊 客
静 馬 客
葵 水 客
花 水 客
小 松 園



▼原稿用紙にペン書き。文字は楷書。結
切は25日着便。書式は発表誌のように。
金井文秋担当

川柳たましま句会

水粉千翁報
人知れず岸辺に咲いて 黙否権 旭 峯
あはれず 岸辺に咲いて 摘みとられ 秀 子
岸壁の誓い男にさせてくれ 林 鶴
母の日の花を忘れぬ子に育ち 好 啓
母さんの白髪も云うて水いらす 千 翁

コスモスに想い打ち明け秋の恋
露路裏に笑いはみ出す水入らず
煮詰った話窓から風を入られ
ぬるま湯のくらに似たる水入らず
蟻が列乱さぬ戦争かも知れぬ
愛嬌のうちの一つの泣きボクロ
良心の戦争千円札拾う
母底うの子のスクラムに突きさう
良し悪しは別母さんが可愛そう

目賀芳月報

備前川柳社句会

美くしい心に月も冴えわたり
恥かしい事があるのに月が冴え
絵に書いた月が舞台をひきたたせ
まん丸い月の心で暮したし
われ孤独月も一人の道をゆく
終列車出してみみ今日月の月
宿直がききれいな月へ欠伸す
名月の窓をナースがあけてくれ
雲過ぎて二人抜けてる月の宴
名月を見せ背中の子をあやし
文明が月見の行事忘れさせ
病身に月よりの使者きれいすぎ
見る月をほめて眺めて夜が更ける
灯を消して月見の酒をくみかわし
大学の子は角材をふり回し

ウイロー社句会(ハワイ)

泣虫が今流行の人氣歌手
泣虫がお教育ママはハッソコリ
泣虫も教子見ればニッソコリ
泣虫と知りつつ叱る親の慈悲
泣虫と言われてた子が社長さん
泣虫の彼奴が総評の幹部とは
泣虫で困った孫が嫁にゆく

梁 二 水
朝 風
里 坊
三 林
八 笑
辛 堂
柳 子
慶 子
扇 水
正 州
芳 月
伊 久
鈴 野
萬 女
博 友
胡 風
一 月
秋 月
ひ 明
柳 天
樂 子
幸 仙
水 仙
久 雄
カ 女
ロ 女
揮 山
峯 丹
暁 舟
内 海
エ 子
ス 子
魔 花
あ 坊

1月の句会

玉造川柳会（大阪市）

時 一月十日（金）

午後六時

所 初・決意・持ち越し
玉造交差点南一〇〇米
大阪信用金庫

南海川柳会

時 一月十六日（木）

午後六時

所 ガイド・当り・脈
ナンバ高架下
親和クラブ

南大阪川柳会

時 一月二十日（月）

午後六時

所 門出・希望・スター・更衣室
生野区北生野町一丁目
乗願寺国分町東三〇〇
米 文秋居近く

泣き虫が今日は可愛い晴れ姿
泣虫がミニスカートで風を切り
アーンアーン泣く内子育
泣虫の子に負けまじと母さびし
泣虫へ床屋給チョコ出してやり
泣虫が甘える時は節をつけ
柳葉

大阪通信病院川柳会

森下愛論報

お互に白髪抜き合う夫婦仲
老いらくの恋白髪など気にせず
肩書も白髪とともに又ふえる
共白髪孫に送られ旅に出る
苦労してまず白髪を見てちょうだい
テキストを片手まだ窓口は馴さういず
夏愛史竹草甘
生論葉莊右子

オースケ川柳会

大坂形水報

上手だがプロの真似はと審査員
当然の様にみられるプロの芸
さすがプロ故障にめげず打点王
セールスへ自己改造を試みる
腹の蟲押えて笑顔のセールスマン
人生の門出をプロにくじひかれ
セールスに慣れたところで失敗し
ベテランのセールス電話で用を足し
九回の王の打順へ腰おろし
一孝博重神有真智
扇夫 則田一人成也

応援の小旗ちぎれて惜敗す
優勝旗応援席も泣いてる
天職として踏切で旗を振り
日の丸を出す日の空は晴れ渡り
セールスに來てはにかなない女
入形木石夢
仙

和歌山短詩型文学クラブ

三幸報

言い訳を考え米屋持つてくる
いつのまに米を噛む癖母に似て
米をとぐ水澄むまでは繰返えし
保有米売ってめしやで喰べている
本家という名目だけで物をいい
三ちゃん米に内閣泡を喰い
いつまでも明治でいたい氣の本家
仏壇の国今に苦勞の尽きぬ米
仏壇を守りして本家落目なり
政治にも凝った本家の井戸も涸れ
祖父だけが本家の誇りもちこたえ
長廊下渡り詰めたらお手洗い
廊下踏む音に煙草を消して立ち
あいてる障子に廊下咳をする
米好きな齡で歴史を知っていた
分家一同本家の揃うめでたい日
まるべに川柳会（大阪市）川村好郎報
見くびられても商売だけはして帰り
茂兄

磨かれた伝統の味



御菓子司

鶴屋八幡

本店・大阪市東区今橋5・電話(203)7281
東京店・東京都千代田区麹町2・電話(261)3996
売店・各百貨店ののれん街

作る人食う人豊作の米でもめ
台風の進路を氣使ひ早寝する
寂しさに夏の烈しさ回顧する
車中にも読書が見えて秋来る
しのびよる氣配を見せ彼岸花
旧式な服でホテルに見くびられ
終発も通りこおるきの恋すむ
どんぐり川柳会（大阪市）川村好郎報
夜景みる心のゆとり夫と居て
この夜景仁徳帝もおよろこび
公害の街とは見えぬいい夜景
ゼット機の下界の夜景点と線
漁り火へ放心の目が動かない
カラポスター見て来た程に夜景
酒の顔見たとたん夜景そちのけ
敏生千双吸喜真
雄長歩楽江風砂
郎里代斗子陸世太

寒くないか一瞬星も目をつむり
スト妥協夜景こんな美しい
口ぐせは裸一貫の過去を持ち
又しても口ぐせに出る子の自慢
口ぐせの儲かりません貸さぬ肚
見くびった鰯の骨が喉に立ち
活気づく妖しき夜景基地近し
慰安旅行夜景も見ず酔いつぶれ
車窓のより夜景ながめて旅終る
療乱のネオンが故郷を捨てさせる
あの叱言口ぐせなのさ気にしえず
口ぐせのよも見えるコマシヤル
ロビーから夜景ながめてひとり旅
判だけはすなの口ぐせようこたえ
あすなる川柳会(大阪市)川村好郎報
悪友にされて藤では拝まれる 青香

大阪文化祭川柳大会入選句

「待つ」 磯野いさむ選
待つ人は帰らず戦後 遠くなり 竹岡 屯坊
「浮世絵」 戸田 古方選
浮世絵の小さき 乳房の女 達 道田 葉平
「読書」 岡橋 宣介選
読みつかれ眼をやる横に水中花 前田 ヒサエ
「公会堂」 川村 好郎選
公会堂これからデモに出る氣勢 西村 左久良
「新聞」 片山 雲雀選
終点で新聞集める 役もあり 丹波 太路
「あいさつ」 古下 俊作選
あいさつを抜ぎいろいろ火が赤い 羽原 静歩
「文楽」 堀口 塊人選
三人が人形 一つに汗をかき 山川 阿茶

飛躍したとこで 梯子を外される
夢ですなあ大蔵省が笑ってる
蒼茫へ飛躍の天地 遠かりき
悪友に救われて から立ち直り
アンテナの役目も兼ねて 社長秘書
積んであつての 飛躍と人知らず
どんぐり川柳会(羽曳野市)川村好郎報
派手に咲く花と 対話の車椅子
派手に音放って 病人ほめられる
ママの手を背に感じて 子は眠り
感情のない手が 売って 是る券
派手好き 下着の 汚れ苦にも せず
台所憂さ 晴らす よに 派手な音
手を合わす 心の奥に 弥陀が住み
どんぶりを持つ 労働者のたくましく
手心が欲しい 粗品が又届き
握手して 退院者に 励まされ
白き手も 農家へ嫁ぐ日 もきまり
二日酔い 派手に飲んだを 悔まれる
始めての 名刺を 派手に まきたがり
生活の 匂いの 中の 独り言
しもやけの 手に 惚れ込んだのも昔
むらくも川柳会(島根県) 藤井明朗報
女房の 小言つづいて 冬仕度
冬仕度 いそげいと 木の 葉散る
冬仕度 値上げブームが 押しよせる
和やかな夕餉の 膳へ 一直線
和やかな人柄と 知る 初対面
和やかな分 開気 英語と 日本語で
和やかな 白髪も まじり 同窓会
和やかに 明治 青年 ハッスルし
和やかに うた 笑顔に 論される
和やかに 父の 笑顔に 論される
和やかに 一家 団らん 旅話し
飛躍したとこで 梯子を外される
夢ですなあ大蔵省が笑ってる
蒼茫へ飛躍の天地 遠かりき
悪友に救われて から立ち直り
アンテナの役目も兼ねて 社長秘書
積んであつての 飛躍と人知らず
どんぐり川柳会(羽曳野市)川村好郎報
派手に咲く花と 対話の車椅子
派手に音放って 病人ほめられる
ママの手を背に感じて 子は眠り
感情のない手が 売って 是る券
派手好き 下着の 汚れ苦にも せず
台所憂さ 晴らす よに 派手な音
手を合わす 心の奥に 弥陀が住み
どんぶりを持つ 労働者のたくましく
手心が欲しい 粗品が又届き
握手して 退院者に 励まされ
白き手も 農家へ嫁ぐ日 もきまり
二日酔い 派手に飲んだを 悔まれる
始めての 名刺を 派手に まきたがり
生活の 匂いの 中の 独り言
しもやけの 手に 惚れ込んだのも昔
むらくも川柳会(島根県) 藤井明朗報
女房の 小言つづいて 冬仕度
冬仕度 いそげいと 木の 葉散る
冬仕度 値上げブームが 押しよせる
和やかな夕餉の 膳へ 一直線
和やかな人柄と 知る 初対面
和やかな分 開気 英語と 日本語で
和やかな 白髪も まじり 同窓会
和やかに 明治 青年 ハッスルし
和やかに うた 笑顔に 論される
和やかに 父の 笑顔に 論される
和やかに 一家 団らん 旅話し
飛躍したとこで 梯子を外される
夢ですなあ大蔵省が笑ってる
蒼茫へ飛躍の天地 遠かりき
悪友に救われて から立ち直り
アンテナの役目も兼ねて 社長秘書
積んであつての 飛躍と人知らず
どんぐり川柳会(羽曳野市)川村好郎報
派手に咲く花と 対話の車椅子
派手に音放って 病人ほめられる
ママの手を背に感じて 子は眠り
感情のない手が 売って 是る券
派手好き 下着の 汚れ苦にも せず
台所憂さ 晴らす よに 派手な音
手を合わす 心の奥に 弥陀が住み
どんぶりを持つ 労働者のたくましく
手心が欲しい 粗品が又届き
握手して 退院者に 励まされ
白き手も 農家へ嫁ぐ日 もきまり
二日酔い 派手に飲んだを 悔まれる
始めての 名刺を 派手に まきたがり
生活の 匂いの 中の 独り言
しもやけの 手に 惚れ込んだのも昔
むらくも川柳会(島根県) 藤井明朗報
女房の 小言つづいて 冬仕度
冬仕度 いそげいと 木の 葉散る
冬仕度 値上げブームが 押しよせる
和やかな夕餉の 膳へ 一直線
和やかな人柄と 知る 初対面
和やかな分 開気 英語と 日本語で
和やかな 白髪も まじり 同窓会
和やかに 明治 青年 ハッスルし
和やかに うた 笑顔に 論される
和やかに 父の 笑顔に 論される
和やかに 一家 団らん 旅話し

老の和やかさうで意地をみせ
和やかなムードの中に保守革新
和やかな集い別れの淋しさよ
駒つなぎ句会
差支え 固い約束反古になり
差支え あると云われていいそれ
仲間割れそばに居るのが差支え
差支えがあつてと代理四角張り
御意見はもつともなれど差支え
差支え出来てファイトの増す人
差支え 出同士が釣で顔合せ
差支え 本当かいなとからかわれ
停電が熱帯魚には差支え
おじょうさんですき野暮なたずね
差支えあつてもないという電話
建増をして税金に差支え
差支え 安い頭を尚さげる
言い張れば差支ええと知った姑
白悟小喜宏規柳み多南祥一鶴英
柳郎路正園一郎信よ津柳恵子丸

高級洋菓子
Pトラス
堺市役所前 TEL(2)2334

本社会会の新会場

会場 以和貴荘 (阿倍野区松崎町二丁目)

電話 622・1275番

踏切

以和貴荘

環状線
天王寺駅

アベノ
近鉄百貨店

三菱銀行

地下鉄
天王寺駅

南海上町線

本社新春句会

日時 一月九日(木) 午後六時
会場 以和貴荘 (いわきそう)

柳話

☆短冊交換会(二人三点以内)

☆四十三年度月間賞杯授与

☆四十三年度全出席者表彰

兼題 「書き初め」

「銚子」

「ゲスト」

「星」

席題 三題(題と選者は当日発表) 各題三句
会費 二百円

★投句だけの方は切手五十円封入

高橋操子 選
後藤志子 選
西尾梅 選
北川春巢 選

中島生々庵

★電話での投句や訂正はご遠慮願います

大阪市南区鰻谷仲之町20

川柳塔社

電話大阪 3985番

2月の兼題 「ガウス」「化ける」「大学」「裏方」

三月号発表(1月15日締切)

川柳塔(10句) 中島生々庵 選

近作柳樽(10句) 西尾葉 選

課題吟(各題5句以内)

「切手」 山本立児 選

「芽」 間島青丹子 選

「人情」 直原七面山 選

★原稿は四百字詰原稿用紙に六枚以内。文字は楷書で新かなづかいにしてください。

四月号発表(2月15日締切)

川柳塔(10句) 中島生々庵 選

近作柳樽(10句) 菊沢小松園 選

課題吟(各題5句以内)

「セールス」 光好陽子 選

「背広」 長谷川紫光 選

「肌」 長谷川三司 選

★川柳塔の投句は本社同人に限ります。
★用紙はなるべく柳箋をご使用ください。

定価 百四十円(送料六円)

半年分 八百七十円(送料共)

一年分 千六百八十円(送料共)

昭和四十三年十二月二十五日印刷
昭和四十四年一月一日発行

大阪市南区鰻谷仲之町二〇番地

編集兼 発行人 中島蓬太郎

印刷所 大陽印刷株式会社

郵便番号 五四二

大阪市南区鰻谷仲之町二〇番地

発行所 川柳塔社

電話 大阪・二七一三九八五番

振替口座 大阪・三三三六八番

疲れたら

さあのもう

連日のお仕事、お酒やタバコのみすぎなどで、肝臓が弱っていませんか。疲れをとり健康を保つには、日頃から肝臓の働きを活発にするよう心がけてください。チオクタンSは、肝臓の働きを高め、疲労をすみやかに回復します。

●肌あれ ●二日酔いにも

〈肝臓を守る〉 肝臓薬・ビタミンなど14種成分配合

チオクタンS

0245555555・1000錠・33000円



フジサワ会の店で
おもてめくください



フジサワ薬品



★あけましておめでとう
ございます。川棚塔伸び
ろと、こしもまたよろ
しくご指導たまわります
ように。

★鞍馬、大八諸先生の原
稿や各地棚増の発表がま
た次号に回った。ご覧
のとおりなので、ご寛容
のほどを。

★最高の句会場が見つ
かった。和を以って貴しと
する「以和貴荘」である
★桐りが羽ばたくようは
新年から縁起がいいぞ。
☆一生に一度はガムシヤ
ラに仕事をしたいと夢み
ていた。それが正夢にな
った。(不二田一三夫)

・2DK・

中野
の都こんぶ



中野物産株式会社

本社：東京都中央区新富町1-1-1
支店：東京都中央区新富町1-1-1
支店：東京都中央区新富町1-1-1
支店：東京都中央区新富町1-1-1
支店：東京都中央区新富町1-1-1

み

んなの暮しが明るくなる
セキスイのプラスチックス



積水化学
本社 大阪市北区宇治町1

近鉄特急で日本の氏神さん初詣と伊勢志摩国立公園初旅

お伊勢さん初詣

神宮(外宮)参拝は伊勢市駅から歩いて10分 外宮〜内宮バス20分
神宮参拝と伊勢志摩スカイライン観光バスは伊勢市・宇治山田駅前から



初詣特急増発 おおみそか全線終夜運転

大阪上本町から……特急1時間53分 片道 750円
京都から……特急2時間23分 片道 870円
名古屋から……特急1時間19分 片道 620円
(いずれも座席指定特急券とも・こども半額)



■近畿東海を便利に結ぶ近鉄特急で伊勢神宮初詣と伊勢志摩国立公園初旅などのご相づきは…近畿日本ツーリスト・日本交通公社・日本旅行の営業所へ



一番よい酒

うまい酒

清酒

菊正宗

宮内庁御用達
菊正宗酒造株式会社
神戸・灘・御影